

今城塚古墳から古代王権を考える—継体即位の歴史的位相—

宮寄 晃臣

はじめに

2020年度春季実態調査(2021年3月24~27日)は北前船寄港地・船主集落をたどる4回目の調査で、この調査シリーズの最後のものと定められた。そのため山陰地方と瀬戸内の寄港地の踏査は断念し、今回の調査は前回の解散地点の金沢を起点に敦賀まで福井県の寄港地、船主集落を訪ね、小浜から鯖街道を経由し京都に入り、その後今回の調査をフィナーレとするため、北前船の起終点の住吉大社に向かった。この間移動は全てチャーターバスだったので、最終日の京都から住吉大社までの間、見学先として今城塚古墳・今城塚古代歴史館とパナソニックミュージアムを選ぶことになった。社研実態調査なので、後者はそれなりに相応しいと理解できると思われるが、前者には説明が必要のように思われる。

何故社研の調査を古墳で行うのか、実は2015年度春季実態調査(2016年3月14~17日)の3月15日に1日かけて、堺市文化観光局世界文化遺産推進室で詳細なレクチャーを受けたうえで、土生田所員の現地解説も加えて百舌鳥古墳群と古市古墳の実踏調査を実施していた⁽¹⁾。これは大阪府・堺市・藤井寺市・羽曳野市の世界遺産登録事業の調査という位置づけの下で実施されたのである。今城塚古墳は高槻市にあって、世界遺産にこの古墳は含まれていないので、2015年度春季実態調査の延長というわけにはいかない。今城塚古墳は陵墓指定されていないがゆえに、今回私たちも古墳を実踏することができたが、大方の見方としてここに葬られているのは第26代とされている継体天皇である。

継体天皇とは今回の実態調査、さらには昨年度の社研の公開シンポジウムとも妙に関係性を持っているように思われる。今城塚古墳は、京都の宿から住吉大社への道すがらにあったことが、調査対象に加わった主たる要因をなしていると思われる。

しかし今回の実態調査先には継体との縁深さを感じる。調査の主たる福井県=越前は継体の母の出身地とされ、継体の父が亡くなった後に継体が育ち、『日本書紀』では武烈亡き後即位すべく迎えられた地(越前三国)とされている。父方は近江に基盤を有し、『古事記』では継体が即位すべく迎えられた地とされ、『日本書紀』には「近江国高島郡三尾別業」(琵琶湖北西)と記され、今回調査した疎水の源、琵琶湖の北西側に位置する。バスで移動した鯖街道沿いも継体勢力の足場になっていたとも考えられる。また継体が即位した最初の宮「樟葉宮」(大阪府枚方市)は今城塚古墳同様淀川水系にあり、今回の調査の最終日の移動ルート京都から住吉大社

への行程が古も栄えた淀川水系にあり、遡ってこの水系が瀬戸内海をとおして九州、朝鮮半島へのルートを開き、当時大和川水系に次いで一定の勢力を保持しえていた圏域だと想像される。そして北前船の起終点であるから解散地として選んだ住吉大社も2点で継体との縁を有しているように思われる。第25代天皇とされる武烈に子はなく、仁徳（第16代）王統断絶の危機となり、継体は武烈との直接の関係性はなく、そこで仁徳の父とされる応神（第15代）の五世孫をもって記紀編纂では即位の正当性、万世一系を示そうとしたと考えられる。その応神は仲哀天皇（第13代）と神功皇后（第14代）の子とされ、住吉大社に祀られている海の三神から朝鮮半島の征服の託宣を神功皇后が授けられながら、仲哀はそれを信じず、その神罰で亡くなったとされる。神功皇后は懐妊しながらも神の託宣を実行すべく、朝鮮半島を征服し、生まれた皇子とも凱旋し、さらに大和国で敵対する異母兄勢力にも勝利し、皇子は応神天皇として即位する⁽²⁾。また、継体を天皇として推戴したのが大連の相伴金村、同じく物部麁鹿火、さらに大臣の許勢男人であり、相伴金村の居は住吉にもあり、九州、朝鮮半島との当時の緊張関係の中で、住吉の地は継体王権の、水軍進路、さらには物流・人流の中継として重要な津となっていたと考えられる。

『古事記』武烈天皇段の終わり部分に次のように記されている。

天皇（武烈）既に崩りましぬ。日統知らず可き王無し。故、品太天皇（応神）の五世之孫、
袁本杼命（継体）、近淡海国自り上り坐さ令メ而、手白髪命於合せまつりて、天下を授け奉りき。

武烈には子がなく、仁徳王統とは傍系の継体が応神五世孫として近江から呼び寄せられ、仁賢天皇（第24代）の皇女手白髪命（『日本書紀』では手白香皇女、仁賢と雄略の娘春日大娘皇女との子、したがって雄略の孫）の入り婿のかたちをとって、王位を継承した。ここでは継体の王位継承を焦点にすることから、日本の古代国家の一側面に接近したい。

1. 今城塚古墳、この地での寿陵は何を意味するのか。

今城塚古墳は大阪府高槻市郡家新町に所在する墳丘全長 190メートルの前方後円墳で「531年に没した継体大王の真の陵墓と考えられ」⁽³⁾ている。『延喜式』には継体陵が「摂津国嶋上郡に所在すると記録されているにも関わらず、嶋下郡にある太田茶臼山古墳(大阪府吹田市太田)を継体陵として宮内庁は比定した結果、今回私たちも継体陵を実踏することができ、堤上の埴輪祭祀の多種多数のレプリカから継体の葬送儀礼の一端を感じることができた。白石[1999b]によれば、「古墳の円筒埴輪の年代研究が進歩した結果、太田茶臼山古墳は五世紀中葉前後の古墳であるのに対して、今城塚古墳が六世紀前半のものであるが知られるようになった」(162頁)

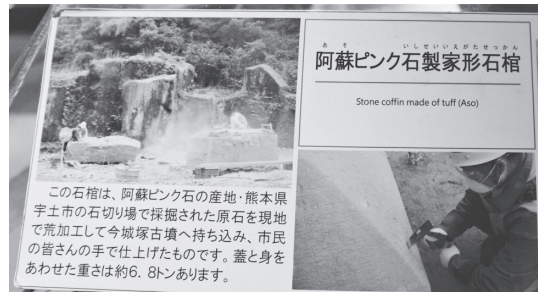


写真 - 1 今城塚古代歴史館内の阿蘇ピンク石製家形石棺とその説明書き 写真 - 2 筆者撮影

ことも今城塚古墳が継体陵であることをより裏付けている。継体が樟葉宮（大阪府枚方市）で即位したのが507年で、崩年が531年⁽⁴⁾と考えられていて、継体陵は生前自ら定めた寿陵のようであるから、円筒埴輪による年代測定は継体即位から没年の幅に合う。

円筒埴輪による年代測定という考古学による知見に依らずとも、今城塚古墳が大王墓であると感じられたのは、隣接する今城塚古代歴史館に展示されているレプリカの石棺である。「平成9年度から10か年にわたる今城塚古墳の発掘調査で、「石棺の破片や副葬品の一部が・・・出土し、その一端が明らかになって、・・・なかでも石棺は、兵庫県高砂産の竜山石、熊本県宇土産の馬門石、大阪・奈良にまたがる二上山白石、いずれも凝灰岩の石棺石材が出土し、3基の家形石棺が納められていたとみられ」⁽⁵⁾とされている。

この調査に基づいて、3つの石棺のレプリカが同館で展示されている。この調査に携われた森田克行氏によれば、「石棺の形式学的な序列としましては、ピンク凝灰岩の家形石棺が先行し、白石凝灰岩の家形石棺は後出です。したがって、継体は前者の石棺に葬られた可能性が高いというのが考古学の常識的な判断にな」(森田 [2000]、80頁) っているという。そして同氏によれば「今城塚古墳を含めて考えますと、淀川・琵琶湖水系にピンク凝灰岩が九州から入ってくるのは、いわば継体の時代であったといえる」(同前) とされている。継体の棺が熊本県宇土産の馬門石、阿蘇溶結凝灰岩であるということは玄界灘、瀬戸内そして淀川を通して運ぶだけの権力をこの王権は有していたことを意味している。また淀川、瀬戸内、玄界灘の水運も掌握していたのであろう。今城塚古墳が陵墓指定されていないから、石槨、石棺がこのように調査された。他の陵墓ではこのような調査はできないので、他の天皇の棺との比較検証はできないのであるが、古市古墳群の中でもこの阿蘇溶結凝灰岩の棺は発掘されている。市野山古墳(伝允恭天皇陵)の陪塚とみられる長持山古墳の家形石棺のうち1基と、その近くの唐櫃山古墳の家形石棺も阿蘇の石材が用いられている(北野 [1999]、77頁)。允恭は実在の天皇で、市野山



写真3 松岳山古墳 筆者撮影

古墳（古市古墳群の北東部）がその陵墓として比定されることに問題はないようで、そこから造営が5世紀中葉だとすれば、継体陵より三四半世紀ほど先行していることになる。

継体の石棺に熊本県宇土産の馬門石が持ちられたのはその色がピンクであること、木棺の時代から棺には水銀朱（辰砂、丹砂）が塗られ、朱には死者再生祈願あるいは逆に死者の封印が籠められ、古市古墳群の中でも最も早く造営された大型古墳の津堂城山古墳（古墳編年表の4期、4世紀後半）の長持形石棺にも朱が用いられていた⁽⁶⁾。

津堂城山古墳の石棺は長持形石棺で、木棺から石棺に移る初期のもので、その石材は今城塚古墳のもう一つの棺と同じ「播磨

の竜山石」で、大和川水系から瀬戸内の水運を利用して運ばれたと考えられる。古市古墳群とは大和川を挟んで対岸に松岳山古墳（4世紀前半造営）があり、ここに長持形石棺の祖形があり、その「石棺材には、讃岐の鷲ノ山石が長側板、単側板」に用いられていて、「これも明らかに瀬戸内の水運とかかわる南河内の勢力が生み出したこと」⁽⁷⁾と白石太一郎氏は発言されている。

河内といっても淀川の河の内の北河内と大和川⁽⁸⁾の河の内である南河内とでは、現在でも少し雰囲気が違うように感じられる。白石氏は藤井寺市教育委員会事務局〔1999〕の質疑応答のなかで次のように述べられている。

「佐原真さんは、畿内というけれども、実は弥生時代にも畿内は決して一つではなくて、北の淀川水系と南の大和水系では土器の様相が全く違うんだということを早くに指摘しておられます。畿内地域というのは、弥生時代以来一つであったわけではなくて、大きく分けると明らかに北の淀川水系と南の大和水系に分けられる。おそらく邪馬台国、それから後のヤマト王権の源領域というのはまさにこのうちの大和川水系にほかならないのではないか」（115-116頁）。

今城塚古墳と同じ高槻市にある安満山山腹の1997年の調査で木棺が発掘され、その中に刀、斧などの鉄製品と青銅鏡5面が副葬されていた。その1面が「青龍三年（235年）銘の方格規矩四神鏡」であり、239年に卑弥呼が魏の皇帝に使節団を送り、そこで「親魏倭王」の印綬とと

もに賜った「銅鏡百枚」の1面と考えられている。纏向から木津川、宇治川、桂川を經由し、淀川から瀬戸内、玄界灘を通して邪馬台国の外交ルートが開けていたか、否かはわからないが、纏向の邪馬台国から淀川の支流、本流を經由して「威信財」が再配分されたことは間違いないであろう。この墳墓の麓には安満環濠集落があったことから、その族長であった可能性が高いであろう。そしてこの環濠集落はまさに淀川の賜物により発展したと考えられるが、白石氏が述べられているようにその淀川水系で陵墓は後にも先にも継体陵のみである。その後の直系の天皇、その王統もこの淀川水系への陵造営は皆無である。継体の淀川水系での寿陵はまさに例外中の例外であった。淀川水系での陵墓造営は継体の意志であったのか。それも自らの強い希望での決定であったのか、それともヤマトの地での造営を快く思わない勢力への遠慮であったのか、そもそもヤマトは継体の本貫地ではなかったのでヤマトでの造営は認められなかったのか、疑問は尽きない。

『古事記』には6番目の妻としてまむた おもち せきひめ茨田連小望の娘関比売を娶ったとされ、茨田連氏の「茨田」は「のちの河内国茨田郡茨田郷（現在の大阪府寝屋川市）の地に相当する地名」（篠川 [2016]、72頁）だそうで、日本書紀で9人いる妻のなかでも、淀川水系出身が確かなものはこの関比売だけで、この婚姻関係だけでは樟葉宮で即位し、この今城塚古墳の地を寿陵とした理由は判然としない。継体勢力の範囲を確定する前に、そもそも武烈天皇自身その実在性も乏しいとされているが、系譜上もその皇子でもなく、ヤマトはおろか畿外の近江出身の継体への王位継承を何故認めざるを得なかったのか、ヤマト王権がこの苦渋の選択をせざるをえなかった状況を考えておきたい。

2. ヤマト王権＝ヤマトエスタブリッシュメントと河内勢力⁽⁹⁾の連合

(1) 王位継承をめぐる継体の特異性と共通性

継体による王位継承の特異性は4点ある。第1の特異性は世子なく天皇が亡くなり、「日統知らず可き王無し」の状況下であったこと、したがって継体には武烈からの王位の系統的継承権はなかった、第2に皇女への入り婿という体裁を整えたことで即位した、第3に畿外出身者であった点である。そして第4に「品太天皇（応神）の五世之孫」として王位継承の正当性を記紀では保持しようとした点である。

しかし、これら4つの特異性は何も継体の王位継承に特有のものではなさそうである。武烈に3代先立つ清寧天皇（第22代）にも世子はいなかった。第2の皇女への入り婿方式は、その後継体の皇子にも引き継がれ、「元妃尾張連草香女、目子媛」との子安閑（26代）ならびに宣化（27代）は継体と同じく仁賢の皇女との婚姻を結んでいる。安閑は仁賢と糠君媛との娘春日山

田皇女、宣化は手白香皇女の妹橘仲皇女と婚姻を結び、王位継承が認められた。継体が王位を継承しても、そのパートナーが元妃（最初のパートナー）であっても畿外の尾張出身ということで、ヤマト系列の皇女との婚姻が王位継承の条件となったのであろう。そして安閑、宣化は王位を継承しても一代限りであったが、雄略の孫手白香皇女と継体の中で生まれた欽明に第 28 代天皇を継がせ、次もその系統が王統を継ぐこととなる。

継体が雄略の娘と仁賢との間で生まれた手白香皇女の入り婿になることで、王位継承が初めて認められたのであろう。では「応神五世孫」という触れ込みは何であったのか。即位時に「応神五世孫」が社会的に認知されていれば、このような入り婿という手続きは必要なかったのではないか。逆に考えれば、即位時にはこのような触れ込みは効果がなかった、さらに言えば触れ込みすらなかった。つまり「応神五世孫」という触れ込みは記紀による造作なのではないかと、筆者には門外漢故に考えられてしまう。

そしてなによりもその応神自身が入り婿だったというのである。井上 [1965] によれば、応神天皇は景行天皇の子五百城入彦皇子の子の品陀真若王の 3 人の娘の入り婿になることで皇位を継承したという。そしてその間に仁徳をもうけたことになっている。応神が神功皇后と仲哀天皇の間に生まれた第 4 皇子であれば、もうそれだけで皇位継承は十分社会的に認知されるはずにもかかわらず、この入り婿の手続きが採られたということは、この記紀の記述が、継体の「応神五世孫」同様に怪しいと考えられる。「応神五世孫」も怪しければ、その基の応神自身が怪しいのである。

実在が確認される最初の大王は第 10 代とされる崇神天皇（和風諡号ミマキイリヒコイニエ、実名ミマキイリヒコ）で、その後の垂仁天皇（和風諡号イクメイイリヒコイサチ、実名イクメイイリヒコ）、景行天皇（和風諡号オホタラシヒコオシロワケ、実名オシロワケ）の自在性は確実視されているようである。前二者はイリ王朝または三輪王朝と呼ばれ、応神は景行の孫娘の入り婿になっているので実名を景行系のホムタワケにしたと考えられる。その間の成務天皇（和風諡号ワカタラシヒコ）、仲哀天皇（和風諡号タラシナカツヒコ）、神功皇后（和風諡号オキナガタラシヒメ）は「ヤマトタケル伝承・・・、神功皇后の伝承が成立して、そういう系譜が加えられたらしい」（和田 [1999]、90 頁）。講演とならんでこのガイドブックを構成する質疑・討論の中で、石部正志氏は「大王の称号としてタラシが流行ったのは七世紀です。だからタラシナカツヒコも七世紀になって新しくつくられた架空の人物であることが文献史学の研究で明らかになっています。つまり仲哀天皇というのは名前からして実在性が全くない人であります」（藤井寺市教育委員会事務局 [1999]、139 頁）と述べられている。応神の後、名前にワケのつく天皇が履仲天皇、反正天皇と続くのでワケ王朝あるいは河内王朝（百舌鳥古墳群も含めて）とも考えられたようである。

神武から開化までは神話の物語としても、景行から応神までの歴史的空白と応神以降のヤマト政権あるいはヤマト王権の歴史的位相が判然となっていない。そこで継体の王位継承の謎に、世子でもなければ畿内出身でもない継体をなぜ天皇に迎えたのかという視点に立って、古市・百舌鳥古墳群形成に結実する河内勢力の拡大がヤマト政権・ヤマト王権に及ぼした影響を明らかにすることを通してアプローチしていきたい⁽¹⁰⁾。

(2) 百舌鳥・古市古墳群の構造的特徴とその根拠

ヤマト王権の大型古墳は図-1 の中大和全体と、河内の古市古墳群、和泉の百舌鳥古墳群に所在すると考えられている。大阪平野に前方後円墳群が最初につくられたのは玉手山古墳群（柏原市）で、大小 14 基の前期の前方後円墳が丘陵の尾根に造られている。そして冒頭で触れた松岳山古墳は大和川北側に造営されていた。そして古市古墳群は大和川の南側に形成され、大和川は古墳時代にはこの松岳山古墳と市野山古墳の間を通過したのち、玉串川、長瀬川に分流し、さらに長瀬川から平野川が分岐し、そこに東除川、西除川が合流し、各河内湖（潟）に注ぎ込み、この大和川水系の河内平野は肥沃の大地であったと考えられる。図-2 に示されているように数多くの集落の遺跡が確認されている。「大阪文化財センターが 1976 年以降、近畿自動車道予定地として松原～東大阪間に行っただけでも・・・13 遺跡に亘」（北野 [2002] 77 頁）ったという。自然環境だけでも、この河内平野の水稲の収穫量も相当のものと思像される。

さて、松岳山古墳は古市古墳群に含まれていないが、その歴史的には興味を湧くところである。讃岐の鷲ノ山石を材料とする長持形の祖形と考えられる石棺が用いられていたからである。この古墳群の最初の大型古墳の津堂城山古墳には朱に塗られた竜田山石で造られた石棺が埋蔵されていた。おそらくこの古墳群の大王墓の石棺は初期は竜田山材の長持形石棺から次第にピンクの阿蘇溶結凝灰岩材の家形石棺に移っていたと考えられる。その点で津堂城山古墳の被葬者は大王級であり、宮内庁もこの石棺発見により陵墓参考地に指定したのであろう。

図-1 に戻って、古墳群からヤマト王権の推移を考えたい。この「大和古墳群」・「柳本古墳群」で陵墓と考えられるのは渋谷向山古墳（宮内庁比定：景行陵）を最後に、陵墓と考えられるのは佐紀古墳群に移動する。白石氏は「佐紀古墳群に営まれた王墓は宝来山古墳と五社神古墳の二基だけと考えておきたい」（白石 [2013]、199 頁）とされている。両墳とも盗掘の記録から長持形石棺が納められていたようである。

宮内庁の比定では宝来山古墳は垂仁陵、五社神古墳は神功陵とされている。第 10 代大王の崇神陵の比定が柳本古墳群の行燈山古墳なので、第 10 代と第 12 代が柳本で、その間の第 11 代の垂仁の陵墓がこの佐紀古墳群にあることは説明のつかぬことで、また神功皇后もその傳承さらにその和風諡号オキナガタラシヒメからしてその実在性が乏しい。この古墳群で最後に造営

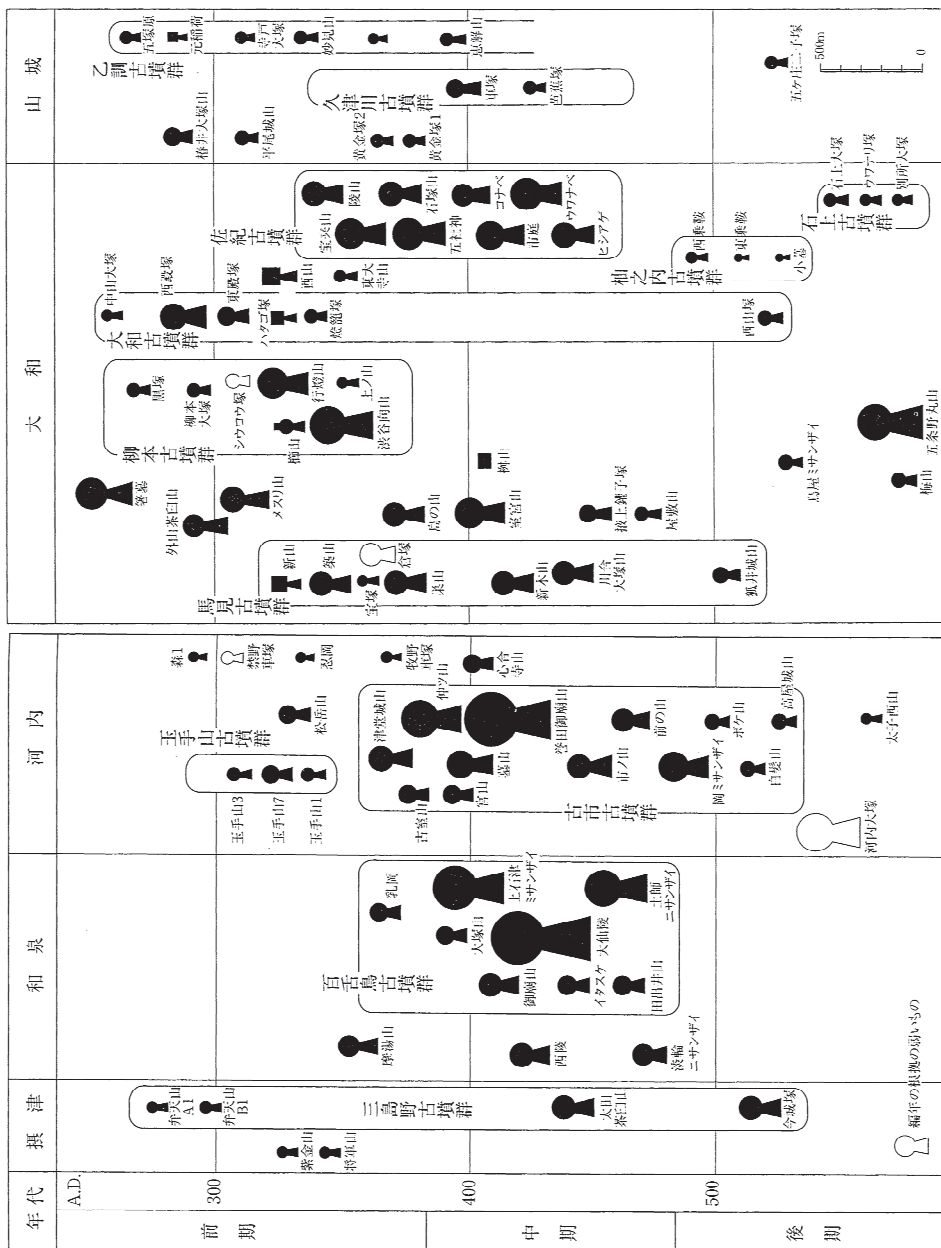


図-1 畿内における大型古墳編年図

出典：白石 [2018] 92-93 頁

されたヒシアゲ古墳についても宮内庁の比定では磐之媛陵とされている。磐之媛は仁徳の後で、履中、反正、允恭を生み、葛城襲津彦の娘である。葛城豪族の奥津城は葛城山麓にあるので、且那、息子、親父とも離れてこの佐紀古墳群に葬られた理由は理解不能である。陵墓と考えられる古墳の推移を考えるうえで謎を秘めた佐紀古墳群から陵墓は古市・百舌鳥古墳群に移る。この謎と景行後の成務天皇、仲哀天皇、神功皇后の謎にはなぜか関連性があるように感じられる。景行から応神への移行はその内実としてオオヤマト（箸墓、外山茶臼山、メスリ山、大和古墳群、柳本古墳群）・佐紀から古市・百舌鳥古墳群への陵墓移動を含んでいたもので、後世になって朝廷の「正当性」を勅撰歴史書として残すには無理を重ねる必要がいくつも生じたと考えられる。その無理の中で残された謎に追ってみたい。

(3) ヤマトエスタブリッシュメント・河内勢力 力連合の成り立ちの謎

(i) 応神の謎 (1) — 仲哀天皇

記紀では仲哀は応神の父であるにも関わらず、宮内庁比定の陵墓、岡ミサンザイは編年図

にあるように、応神比定の菅田御廟山より新しい。この岡ミサンザイが雄略の陵墓である蓋然性の高さについてはすでに多くの指摘があるところである

また、仲哀は『古事記』では応神誕生前に墨江の3神（上筒之男、中筒之男、底筒之男）の罰で亡くなっている。今回の事態調査の解散地の住吉大社には4つの祠があり、その3つはこの墨江の3神を祀り、もう一つは神功皇后を祀っている。仲哀が「筑紫の宮」で熊曾を伐とうとしていた時、この3神が神功に神懸かり、「西のほうにある宝物が多い国」を従えとの託宣をしたにもかかわらず、いつわりごとをいう神と無視した神罰が祟るといふ筋書きである。

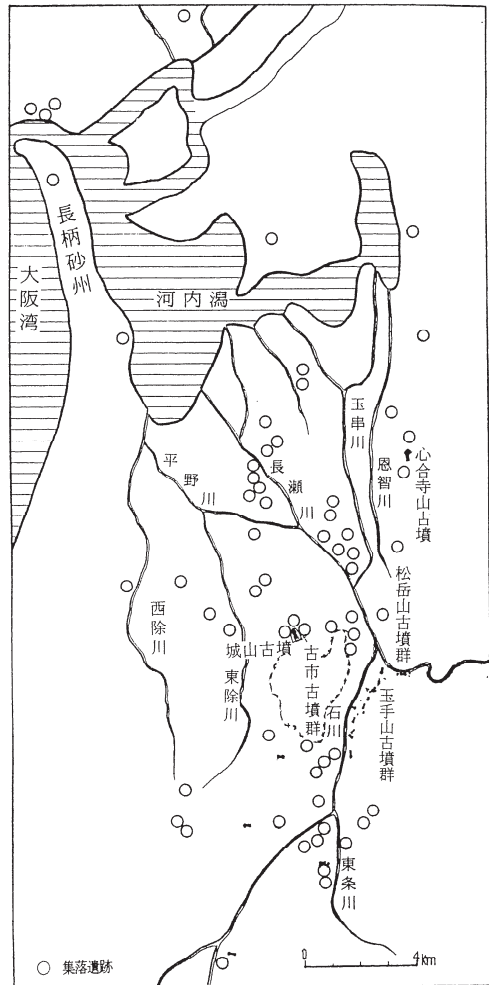


図-2 古墳時代前期における河内地域の
集落と主な古墳

出典：北野 [2002] 77 頁

(ii) 応神の謎 (2) —神功皇后

神功は託宣にしたがい、応神を身ごもりながら、「西のほうにある宝物が多い国」「新羅」を討ち、筑紫に凱旋し、そこで応神(品陀和氣命)^{ほむだわけのみこと}を出産する。そして、大和に上る途上に待ち伏せていた香坂王と忍熊王の軍を打ち破るのである。香坂王は斗賀野で、その成否を占う中で亡くなったとされている。そして、おそらく難波で、忍熊王との船上戦があり、「喪の船」の謀で忍熊王軍は山城まで後退を余儀なくされ、ここで陣容を立て直し、両軍激しい戦闘をまじえたとされる。ここで「宇佐曲豆留」の謀でまたしても不意を打たれた忍熊王軍は逢坂まで後退し、「御子の軍」はこれに追いつき、忍熊王軍を攻め破って、滋賀の沙沙那美で「御子の軍」は「敵軍を一人あまさず斬り殺した」と記されている。その後忍熊王は淡海に入水したというのである。語るに落ちる謀が一度ならず用いられ、忍熊王軍は応神軍によって殲滅された。

古事記の神功皇后による「新羅征伐」伝承は物語であろうが、この凱旋から応神による忍熊王軍の殲滅戦は、そのような事実があったことが十分想像される。であれば、応神は自身よりも「正統な」王位後継者と考えられる香坂王、忍熊王を亡き者にしたことになる。

香坂王と忍熊王は古事記では仲哀が景行の皇子大江王の娘の娘大中津比売命を娶り、その間に生まれた皇子という系図になっている⁽¹¹⁾。

景行の孫であれば、「日嗣ぎ」の優先はこの両皇子のいずれかにあると考えられ、また神功の実在性が乏しければ、忍熊王の軍隊を打ち破ったのは応神あるいはその祖(河内の豪族)ということになる。であれば、応神はヤマト王権の正統な「日嗣ぎ」を亡き者にして、王権を篡奪したことになるのではないだろうか⁽¹²⁾。香坂王、忍熊王の戦死が、8世紀初め記紀において仲哀、神功を登場させたと考えられる。応神が仲哀と神功の子であれば、王位継承に他の条件を加える必要は一切なかったであろう。景行の孫の品陀真若王の娘の入り婿になったこと自体に、応神が仲哀・神功の御子との社会的認識・認知がなかったことを示している。また、その勢力つまり河内勢力をヤマトエスタブリッシュメントが認めなければならなかった事情があったのであろう。継体が旧政権内から大伴金村、物部麴鹿火等に推戴されたことをここに逆投影すると、応神の河内勢力を旧政権内で支えたのは、葛城襲津彦で、この葛城本宗家は仁徳に磐之媛を嫁がせ履中、反正、允恭をもうけ、履中には黒姫を嫁がせ市辺押磐王をもうけ、市辺押磐王には美媛を嫁がせ、仁賢をもうけている点から考えてもその可能性は高いと考えられる⁽¹³⁾。

(3) ヤマトエスタブリッシュメント・河内勢力連合の混乱

(i) 大山守皇子の変

応神の跡目も異母兄弟間での暗闘を伴ったと考えられる。応神には皇子が3人いて、応神が世子と考えていた3男の菟道稚郎子を亡き者にせんと、応神死後長子の大山守皇子が「数百の

兵を率いて」(日本書紀) 宇治に攻め入り、大山守皇子はそこで水死し、菟道稚郎子と次男の仁徳(大鷦鷯皇子)は王位を譲り合いながらも、菟道稚郎子は早逝したか、自殺(日本書紀)したか、謎の死をとげ、結局仁徳が即位することとなった。

(ii) 住吉仲皇子の変

日本書紀では概ね次のことが記されている。仁徳の喪が明け、履中が黒媛を娶る前に、履中の異母弟の住吉仲皇子(古事記では墨江中王)がこの黒媛を騙し犯したうえで、兵を興して、難波高津宮を取り囲み、宮を焼き、王位の篡奪を図り、履中は大和の石上まで逃れた。履中は瑞齒別皇子(後の反正天皇)に住吉仲皇子殺害を命じ、瑞齒別皇子は住吉仲皇子の配下の刺領巾に住吉仲皇子殺害を命じ、刺領巾はこれを実行するも、履中を難波高津宮で救った平群の木菟宿禰によって「自分の君を殺した」咎で処分された。

(iii) 雄略による大粛清

履中、反正、允恭は同母兄弟とされているものの、「仁徳の王統が允恭に始まる王統を笑いものにする伝承」(古市 [2018]、30 頁)があり、叙上のように仁徳、履中、市辺押磐王の仁徳王統は葛城の媛を娶っているのに、允恭は畿外の「近江の坂田郡の出自とされる、忍坂大中姫」一人しか娶らず、その子の中にも長子の木梨軽王と軽郎女の同母兄妹間の悲恋の伝承があり⁽¹⁴⁾、允恭の他の兄弟安康、雄略の下で、この仁徳王統との対立は先鋭化し、それのみならず雄略の代にはヤマトエスタブリッシュメントへの対立も先鋭化するものとなる。

以下日本書紀に沿ってその対立を整理しておきたい。まずは安康から。安康は仁徳と髪長媛との皇子大草香皇子の妹幡梭皇女を娶りたくその申し出を根使主を遣わせてしたところ、根使主のいつわりを信じ、安康は兵らを遣わして、大草香皇子を攻め殺し、大草香皇子の妻中蒂姫命を皇后にし、幡梭皇女を息子の大泊瀬皇子(雄略)に娶らせた。中蒂姫命には大草香皇子の子眉輪王^{まよわのおおきみ}がいて、安康がこの経緯から「眉輪王がこわい」と中蒂姫命に語ったことを聞きつけた眉輪王が「父の仇」として安康を殺害する。

これを知った雄略は他の兄たちを「疑い」、兵を率いて、八釣白彦皇子(同母兄)を問いつめ、即座に斬殺し、そしてもう一人の兄坂合黒彦皇子は眉輪王と共に葛城本宗家の円大臣に逃げ込み、雄略がその引き渡しを命じたものの、これに応じなかったので、家に火を放ち、坂合黒彦皇子、眉輪王、円大臣は共に見分けがつかぬほど、焼き殺された。

また雄略は履中と黒媛の子市辺押磐皇子をいつわって巻狩りに誘い、射殺し、市辺押磐皇子の同母弟の御馬皇子も合戦で捕縛し、処刑している。円大臣だけでなく、市辺押磐皇子、御馬皇子の殺害は明らかに葛城氏への雄略の攻撃で、これに勝利したものと考えられよう。

さらに雄略はヤマトエスタブリッシュメントへの攻撃を代を跨いで続け、ターゲットは吉備氏であった。まず、吉備下道臣前津屋の不敬の咎で「物部の兵士 30 人を遣わして、前津屋と合せて、同族 70 人を殺させた」。雄略には 3 人の皇子がいて、自ら殺害した円大臣を父とする韓比売との子白髪皇子(清寧天皇)、吉備上道臣を父とする稚媛との子である磐城皇子と星川稚宮皇子で、雄略は大伴室屋と東漢掬直に遺言で星川稚宮皇子に警戒するよう伝えていて、雄略死後、稚媛と星川稚宮皇子が「大蔵の役所」を占拠した。遺言を受け取っていた大伴室屋と東漢掬直は兵を率いて大蔵を取り囲み、火を放ち、稚媛と星川稚宮皇子らを焼き殺した。雄略の大粛清は仁徳王統への攻撃をさらに超え、ヤマトエスタブリッシュメントへの攻撃にも発展していったといえよう。

3. 古市・百舌鳥古墳群の特徴－鉄製武器の副葬

表－1 古市古墳群からの武器出土遺物一覧

編年	古墳名	所在地	武器	備考
4 期	津堂城山	藤井寺市津堂	刀・剣・環頭大刀・鉄素環頭剣・銅鏃・鉄鏃・金銅弓筈・銅製矢筈・木製装具片	
5 期	大鳥塚	藤井寺市古室	刀・剣・環頭大刀・矛・鉄鏃	
5 期	高塚山	藤井寺市沢田	刀 7・剣 7・鉄鏃約 400・矛 11	消滅
4 期	楯塚	藤井寺市道明寺	刀 10・剣 7・鉄鏃 388	消滅
			前方部副葬施設：刀 40・剣 15・矛 6	
6 期	珠金塚	藤井寺市道明寺	南：刀 10・剣 7・鉄鏃 250	消滅
			北：刀 4・剣 1・鉄鏃 76	
6 期	鞍塚	藤井寺市道明寺	刀 4・剣 2・鉄鏃 114・矛 3	消滅
	丸山	羽曳野市誉田	刀・鹿角製刀装具・鉄鏃	
6 期	アリ山	藤井寺市野中	中央施設：鉄槍先 40・鉄矛 3・鉄鏃 70	
			北施設：鉄刀 77・鉄剣 8・鉄槍先 8・鉄鏃 1542	
	野中	藤井寺市野中	刀 153・剣 16・矛 3・鉄鏃約 740	
	西墓山	藤井寺市青山	刀・剣・短剣・槍総数 200 以上	消滅
7 期	長持山	藤井寺市沢田	刀・矛・鉄鏃	消滅
7 期	唐櫃山	藤井寺市国分	刀・剣・鉄鏃・直弧文付鹿角製刀装具	
7 期	藤の森	藤井寺市野中	鉄鏃	消滅
8 期	峯ヶ塚	羽曳野市軽里	刀 15 以上・鉄鏃 300 以上	

資料：藤井 [1999] より作成

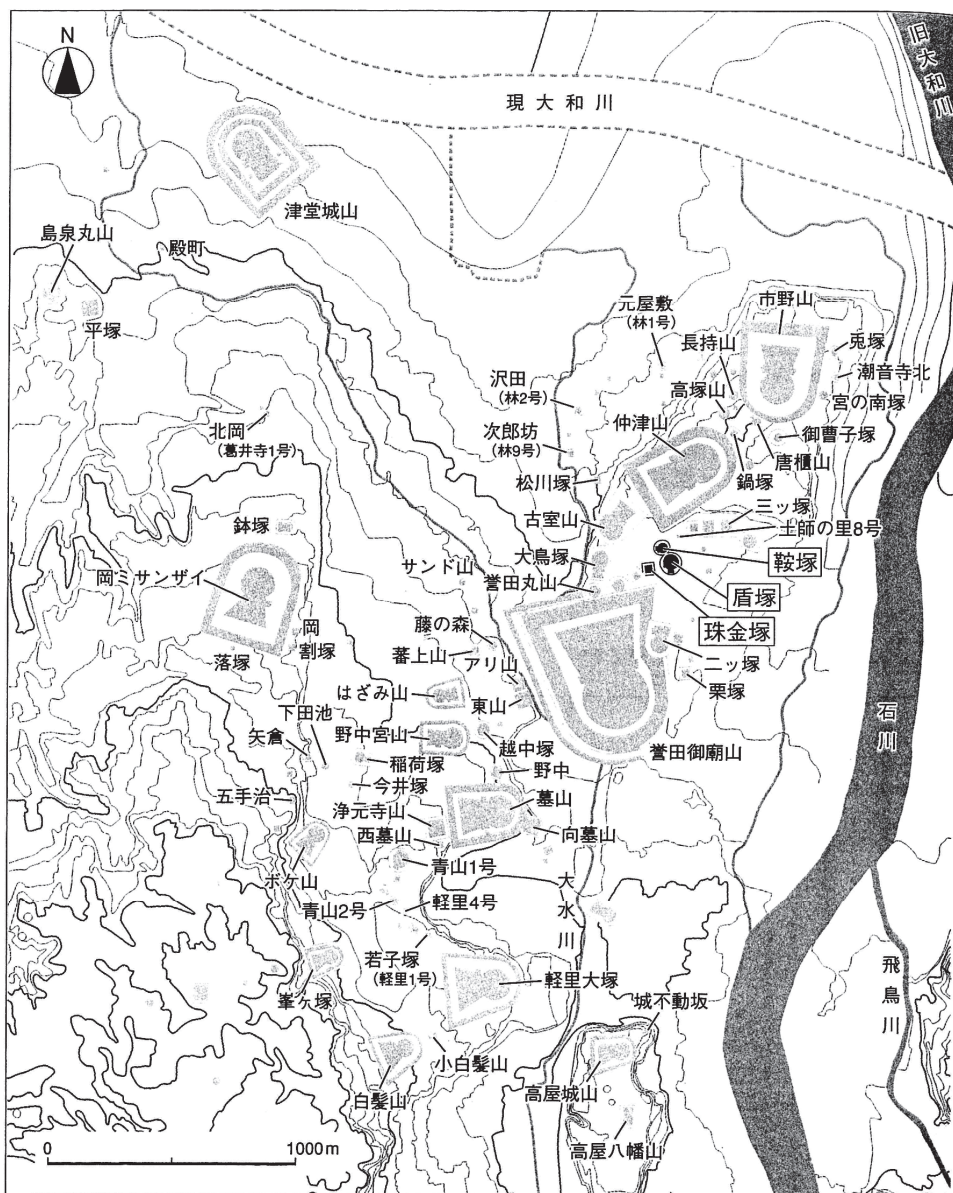


図-3 古市古墳群の古墳分布

出典：田中 [2016] 7頁

ヤマトエスタブリッシュメント・河内勢力連合の成り立ちとその混乱を記紀を手掛かりにみてきたが、これらの経緯が古市・百舌鳥古墳群の特徴にも反映されている。それは多くの実物の実戦用鉄製武器の副葬である。

表-1 は藤井氏が北野 [1976] を基に作成し、藤井氏による峯ヶ塚古墳の紹介を加えたもので

ある。表の古墳のなかには消失したもの、埋設したものもあり、田中 [2016] の分布図を引用しておいた。順次表中の古墳の説明を簡単にしておきたい。この中では丸山古墳から国宝の金銅製鞍金具 2 点が出土し、アリ山古墳とともに菅田御廟山古墳（応神陵）の陪塚で、野中古墳と西墓山古墳は墓山古墳の陪塚と考えられている。宮内庁は墓山古墳を菅田御廟山古墳の陪塚と比定しているが、古市古墳群で 6 番目の規模の前方後円墳で陪塚を有する陪塚というのも奇妙だし、また造営は墓山古墳の方が古いので、菅田御廟山古墳の陪塚とは考えられない。比定することはできないが、大王級の主墓であることには間違いはないであろう。また、拙稿では菅田御廟山古墳を、筆者自身根拠不明ながら応神陵と考えることにしたい。

楯塚古墳、鞍塚古墳、珠金塚古墳は、藤井寺市によれば「4 世紀末から 5 世紀後半に順次出来上がった中規模の立派な古墳で・・・これらの古墳の主は、土師氏の族長ではなかったかと考え」⁽¹⁵⁾ られている。所在地名の道明寺は道明寺八幡宮に因み、その由来は土師神社 (<https://www.domyojitenmangu.com/history.html>) で、土師氏の里では、「土師の里埴輪窯の 11 基、土師の里南埴輪窯の 2 基のほか、・・・菅田白鳥遺跡で 11 基、・・・野々上遺跡で 2 基の登窯形式の埴輪を焼いた窯が発掘調査で見つかって」て、「土師の里埴輪窯→応神天皇陵古墳・允恭天皇陵古墳、菅田白鳥埴輪窯→白鳥陵（軽里大塚）、野々上埴輪窯→仁賢天皇陵古墳といった関係が想定されて」（藤井寺市・藤井寺市教育委員会 [2016]、18 頁）いるようである。古事記によると、土師氏の祖は出雲出身の野見宿禰とされるが、この登窯による埴輪の量産は須恵器に伴って朝鮮半島からもたらされた新技術であり、さらに土師氏は埴輪だけでなく、相似形の各地の巨大古墳造営にも大きな役割を果たしたと考えられている。

技術者集団の土師氏の族長の墳墓に大量の鉄製武器が供献されていた理由を考えると、直木 [1964] がすでに指摘されているように、土師氏は古墳造営、したがって土木作業にも携わっていたことを考えると、屈強な人々から構成されていたことが想像され、そういった人々を武装させれば、即強靱な軍隊に編成変えることが可能で、しかもその技術は建造から破壊工作まで請け負うこともできるので、強力な軍隊でもあったと考えられる。

さらに現在の藤井寺市、羽曳野市には文氏、船氏、津氏、葛井氏^{ふじい}等多くの渡来系の伝承が残され、百濟等朝鮮半島南部から最先端の技術が伝わり、これら渡来系の人々の居住するところとなった。こうした氏族も土師氏同様の軍事組織にもなりえていたと考えられるのである。

高塚山古墳は仲津山古墳の陪塚、唐櫃古墳、長持山古墳は市野山古墳（允恭陵）と考えられているようである。

石部 [1999] によれば、楯塚山古墳は津堂城山古墳と同じ時期（4 期）に、大鳥塚古墳、高塚山古墳は中津山古墳、墓山古墳と同じ時期（5 期）に、鞍塚古墳、珠金塚古墳は菅田御廟山古墳したがって、丸山古墳もアリ山古墳も同じ時期（6 期）に、市野山古墳、唐櫃古墳、長持山古

墳、藤の森古墳は同じ7期に造営され、意外にも野中古墳もこの7期に造営されている。峯ヶ塚古墳は岡ミサンザイ古墳と同じ8期に造営されているという。

表中で、陪塚だけでなく、独立墳でも多くの鉄製武器が副葬されていることに大いなる驚きを感じざるをえない。また北野 [1976] によれば野中古墳には計 36 kg もの鉄鋌も副葬されていた⁽¹⁶⁾。

5 世紀中葉まで鉄の国内での生産は可能性が薄く、あっても武器としても威信財の素材としても粗悪であったと考えられる。このヤマトエスタブリッシュメント・勢力を連合で考えると、朝鮮半島南部の加耶・百済からこのヤマト・河内連合が独占的に供給を受けていた舶載の希少材を惜しみもなく、古墳に副葬していた。表では武器に限定して鉄製品の副葬をまとめたが、副葬された鉄製品はこれ以外に武具、馬具、農具・工具にも至っている。

古市古墳群の出土品の中から、この群の特質を考えると、すでに紹介しておいたように、石棺が、津堂城山古墳で長持形、長持山古墳、唐櫃古墳で冢形石棺が出土している。津堂城山古墳についてはこの点で被葬者が大王級クラスであったことが想像され、また長持山古墳、唐櫃古墳については市野山古墳（允恭陵）の陪塚でありながら、石棺が用いられただけでなく、馬具も出土されている。長持山からは鉄地金銅張鞍金具、轡、輪鐙、馬飾りの杏葉（ぎょうよう）が、唐櫃からは鉄地金銅張 f 字形轡、笠鋌、鉸具が出土している。この両墳に先立って造営された鞍塚古墳も名称の由来通り鞍金具、轡、輪鐙、鉸具等鉄製馬具が出土している。北野 [2000] によると、この「鞍塚の鞍金具は丸山の馬具を模倣した鉄製品という点に特色があり、丸山の鞍金具は「慕容鮮卑の中で作られた、つまり朝陽という地域を中心として出てくる馬具と共通する部分が強く、「丸山の馬具は高位の首長が舶載品として入手した威信財的な性質のものと考えられ」とされている。そして次のように述べられている。「鞍塚からは轡、輪鐙なども伴出していることからすると騎馬専用馬具の存在は十分に裏付けられると私は考えられます。馬具の登場というものは慕容鮮卑、高句麗、そして百済というものを貫く軸線上において出現したものであるということが出来ます。そしてそれが古市古墳群の中でも古い段階の古墳の中からは出土しないで、古市古墳群の中でも中葉からあとの段階になると馬具が出てくるということ、これはですから倭の五王の時代というものの中にあてはめて考えてみますと非常に面白い事柄であります」（北野 [2000]、117—118 頁）。馬が生息していなかった日本で、このように馬具が出土したのは鉄同様朝鮮半島から馬、馬具のみならず、馬具生産の知識・技術、馬術・馬飼いの知識・技術を渡来人を通して先進的に獲得していったことを意味している。

古市古墳群副葬品で注目されるものとして須恵器、馬具についてこれまで言及してきたが、筆者にとって最も注目されるものは大量の鉄製品である。当時鉄自体がヤマト・河内にはおそらく加耶から王権管理の下で調達され、これもおそらく鉄鋌で玄界灘、瀬戸内、難波津、河内

湖、大和川を經由して運ばれ、河内の鍛冶工房で様々な鉄製品が生産され、配下におそらく多くの場合米と交換に支給されたと想像される。鉄製農具は普通の農作業だけでなく、農業用水の確保、開墾等にも絶大な威力を発揮し農業生産を飛躍的に高めたに違いない。また当時の集団的戦いにとって最も必要な武器は弓矢であったであろう。

古墳へは当然弓矢の完成形として埋納され、出土時には矢柄、矢羽、矢筈は腐食し、鉄鏃のみ（幸運にも矢柄との接続部の口巻が残っている場合もあるようだが）確認されている。

表-2 は野中古墳の鏃を埋納群別にまた型式別に分類して北野氏が明らかにしたものである。次頁の図-4 は田中氏が古墳時代中期を前半、半ば、後半に分けて（縦列）、百舌鳥古墳群からは3基、七観古墳：ミサンザイ古墳（履中陵）の陪塚、百舌鳥76号墳：原山古墳、カトンボ山古墳：御廟山古墳の陪塚、古市古墳群からは7基と黒姫山古墳の計11基から出土した鉄鏃の変遷を明らかにしたもので、野中古墳はこのなかでは古墳中期の半ばから後半にかかるころのもの^{かえし}のようである。26は逆刺のついた腸挟柳葉式鉄鏃^{わたぐりやないば}で、27、28と順に鏃の頸部が長くなり、全体的にも頸部が時を追うごとに長くなっている。その理由を田中氏は「甲冑と鉄鏃の相関関係」にあると、次のように記している。「甲冑の出現が鏃身の大型化した重厚な平根系鉄鏃への形状の統一と量産化を招き、これが甲冑の生産の拡大と銚留甲冑への移行を促すことになり、さらにこれを受けてより貫通力にすぐれた尖根系鉄鏃の導入へとつづく」（田中 [2016] 56頁）と。したがって、出土した鉄鏃は田中氏の主張通り、「実用を第1義とした、まさに武器として開発、生産」されたものといえよう⁽¹⁷⁾。

表-2 野中古墳鉄鏃の群別型式別数量

	椿葉式	柳葉式	腸挟柳葉式	鑿矢式	小計
1群	21	11		53	85
2群			43		43
3群	39			9	48
4群			49		49
5群	49				49
6群	13	35	1		49
7群		48			48
7'群	49				49
8群		46			46
8'群			30		30
8''群		24			24
9-4群	48		54	103	205
10群		15+攪乱部			15+
小計	219	179+	177	165	740+

出典：北野 [1976] 125頁

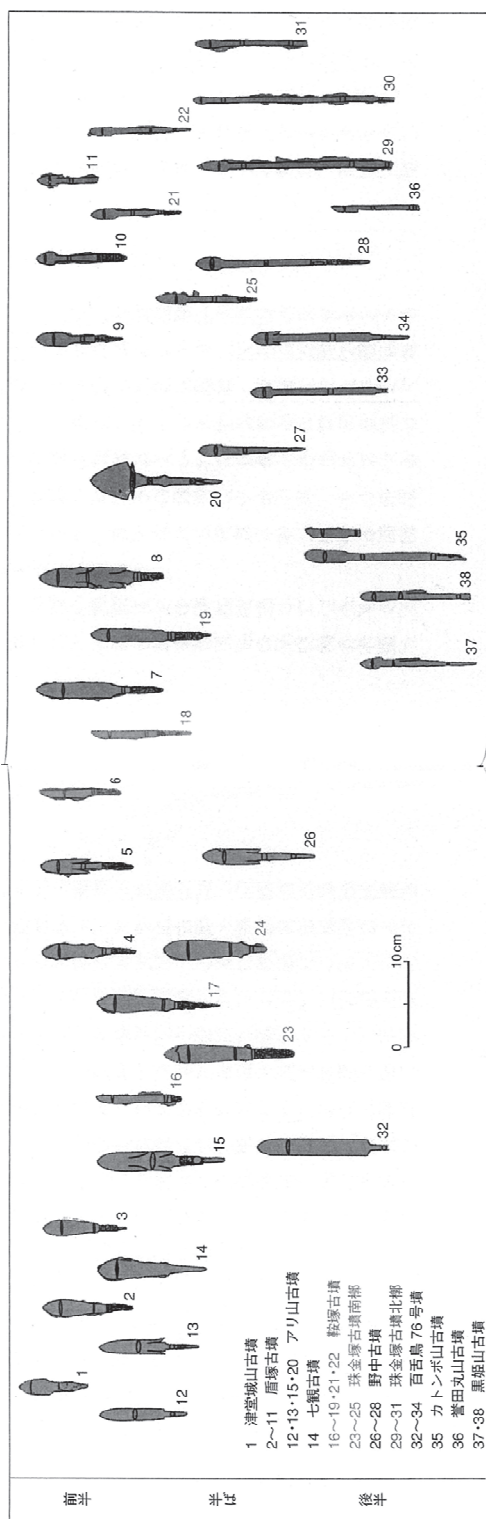


図-4 古墳時代中期における古市・百舌鳥古墳群の鉄鍔の変遷

出典：田中 [2016]、54-55頁

また鑿矢式鉄鏃は防御具を鑿つために用いられたと考えられ、射手が戦闘実践で携帯する矢のセットと同じ方式で埋納されたと考えられる。したがって、北野氏がこれら発掘調査に携わった時点で明らかにしたように、「五世紀中葉ごろまでの段階では・・・古墳に実用の武器を恣意的と感じられるほど大量に埋納するという社会的習俗」（北野 [1976]、235 頁）が見られたのであり、その理由は後ほど記していきたい。

これら貴重な鉄製農具、鉄製武器が大量に埋納されるとは、筆者にとっては勿体無い行為として映る。その前に確認しておきたい。副葬品が埋納される場合とは、独立墳の場合、埋葬者が亡くなった場合で、副葬品はその埋葬者へのお供えとして献じられる。北野氏はこれを「供献」と規定された。このような場合、副葬品は埋葬者が使用していた武具、刀、剣であることは容易に想像される。したがって、アリ山古墳、野中古墳のように、大量の刀と鉄鏃が埋納されているのは、このような場合とはけた違いに状況が違っている。両墳とも陪塚であり、木棺、水銀朱が確認されているので位も高い、軍事に従事した、したがって主墳の王に仕えた將軍級の人体が直葬されていたと考えられる。表-2 は野中古墳を調査された北野氏が作成されたものである。野中古墳でのこの鉄鏃の「供献」はこの古墳に直葬される將軍級の武将の配下の何人かが弓矢をいくつかの束にしてセレモニーとして供えたと想像されるのである。次頁の写真-4 は大阪府立近つ飛鳥博物館に展示されているアリ山古墳副葬品を復元したものを撮影したものである。弓矢の往時の供献の仕方がうかがえられる。アリ山古墳北施設に供献した 1542 本の一部である。いくつかの束にしているのは、その本数を強調する目的があつたのと考えられる。ただし直葬された將軍級の武将のために供えたものではなく、この將軍級の武将が仕えた王の後継者に、供えた者が「叛意なきこと」を示すためにセレモニーとして「供献」したと考えられるのである。

1612 本の弓矢、740 本の弓矢を埋めてしまうなど、筆者からすれば勿体無い極みである。しかしこの行為が勿体無くないと考えられる場合を想像すると、自分の命、一家、一族の命と天秤にかけられている場合で、そのような場合であれば、大量の刀と鉄鏃は差し出しても勿体無くない。命がかかっているのだから。しかしただ差し出すだけでは、天に唾する如く、天に弓引くものとなり、その弓が己の命を奪うことにもなりかねない。差し出す方も、ただ武装解除に応じるだけでは、差し出した武器で身の危険を招くことにもなりかねない。

亡き王の継承王も亡き王の配下で肉厚の椿葉型鏃の弓矢、腸を挟む弓矢、鑿つ弓矢を大量に保有されていられては安心してられないであろう。ことに前王、宿敵、本来の王位継承者者を自らの手で亡き者にしたような極端な場合はなおさらのことである。

実際に古市・百舌鳥に巨大古墳が造営された時期には、先にみた記紀の整理で明らかのようにこのような謀殺は繰り返して起きていたと考えられる。記紀が歴史的事実をそのまま記して

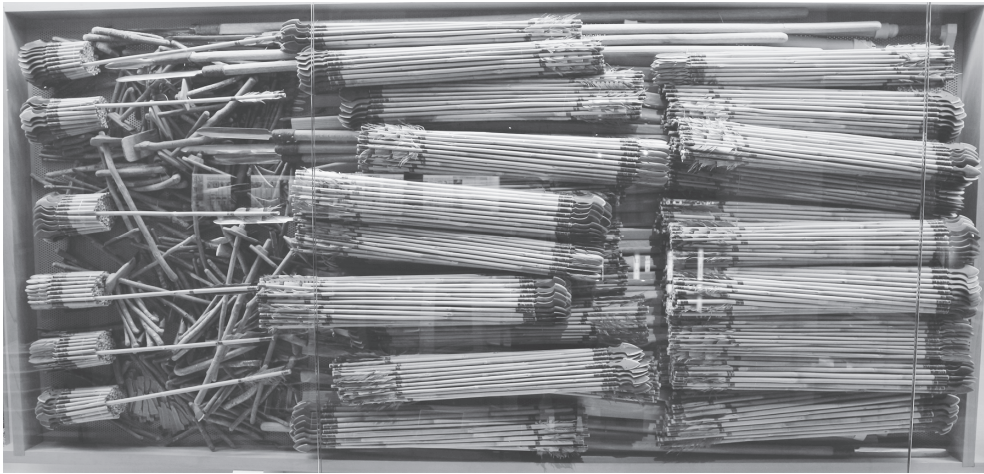


写真 - 4 アリ山古墳副葬品復元（大阪府立近つ飛鳥博物館展示）、筆者撮影。

いるとは考えられないが、当時そのような謀殺は日常的に繰り返されていたと考えられる。

古墳への「供献」は藤井氏が述べられるように、それは「廃棄」そのものである。理性的に考えれば、鉄はもう一度溶解し、鋳直すれば、なんぼでも使える。それも舶載品と考えられる鉄を「廃棄」することはもはや理性がそこには正常に働いているとは考えられない。理性が正常に働いていないのは、ここで働いているのが恐怖だからなのであり、この古市・百舌鳥古墳の造成の時代は、大粛清が行われる世の常で、恐怖が人を動かすものとなっていたのであろう。

実戦で用いられる大量の鉄製武器の古墳への供献＝廃棄は、以上のように王権内で、勢力内で繰り返された大粛清の下で、新たな権力者に「叛意なきこと」を示すために、自らが仕えた権力者の墓墳に廃棄したもので、恐怖から生じた行為であったと考えられる。

4. 河内勢力の経済基盤

もちろん、この鉄、鉄製武器の埋納は一方で朝鮮半島での鉄の比較的に安定的な確保があったればこそ実現されたとも考えられる。百済、伽耶への援軍が招来されることは十分想定されるし、それに備えるために一定の鉄製武器の保管は必要である。いざという時の備えもあって、そのうえで古墳への鉄、鉄製武器の埋納が実現された。それは朝鮮から安定的に鉄が輸入され、その輸入を可能とする経済力があったからだと考えられる。

朝鮮半島から鉄をどのように調達したかを想像すると、先に紹介した福泉洞博物館の展示図録に「鉄がその当時の最も主要な財源であった」と記されていたように、鉄は財源を得るた

めの交換財であったと考えられる。交換といっても、鉄は当時朝鮮の諸国にとってもいわば戦略財であり、国レベルでの交渉の上で取引されたと考えなければならない。『魏書』弁辰条には「国鉄を出す。韓・濊・倭、皆従いてこれをとる。諸々の市買みな鉄を用い、中国が銭を用いるが如し」（この引用は白石 [2013] より）とあるという。弁辰とは後の伽耶で、それ以外では後の新羅、現在の蔚山辺りでも鉄は産出したそうである。日本で最も早く鉄文化が定着したのは北部九州であり、須玖遺跡、小笹遺跡等で鉄鏃等が出土している。それ以前の石器時代から北部九州では水田稲作がムラ単位で定着していた。筆者も、今回の社研本体の実態調査に先駆けて村上グループ研で九州調査の再訪を実施した際に見学した板付遺跡では、1977～1978年の発掘調査で「環濠集落の営まれた弥生時代前期初頭と、さらにさかのぼる弥生時代早期の水田、およびそれに付随する井堰や水路といった灌漑施設を確認することができ」（板付遺跡弥生館図録Ⅲ頁）たとされている。ジャポニカ米の起源は中国大陸ではあるものの、その水田稲作の伝達は朝鮮半島を経由する。この水田稲作が北部九州ではすでに弥生早期に灌漑施設を伴って開始され、弥生前期初頭には環濠集落すなわちムラ形成の上で実現されていた。

九州北部から水田稲作が各地に伝播していくが、そのうち「北部九州から関門海峡を抜けて瀬戸内海を通り、畿内に達するルート」（山崎 [2008]、86頁）で大阪平野にも伝わったと考えられる。ここでは和泉の池上曾根遺跡で確認しておきたい。大阪府立弥生文化博物館の展示パネルには「年輪年代法により、大型建物の柱の伐採年が紀元前52年であることが判明し、それが弥生時代中期後半にあたることが判明」と記されている。水田稲作を基盤とする環濠集落の形成にこれほどの時間差があることが確認できる。同館の展示パネルの写真を示しておく。ここでいくつかのムラが示されているが、こうしたムラがその拠点となって、水田稲作が畿内に広まったといえよう。前出の図-2（130頁）の集落遺跡をもう一度見ていただければ、その具体的広がり方がイメージできるのではないかと考えられる。

先に挙げた古墳時代前期の河内地域の集落と次頁の弥生時代中期の泉南のムラの遺跡を考え合わせると河内勢力が肥沃な水田を基礎とした数々の集落によって支えられていたことが想像できるであろう。またこの肥沃な水田地帯がヤマト王権にとっても食料供給基地になっていたと考えられる。

大阪府立近かつ飛鳥博物館 [2019] には「纏向遺跡の特徴として重要な指摘がされています。それは、農耕の痕跡が薄いということです。遺跡からはさまざまな木製品が出土していますが、土木用の鋤などが出土するのに対して、農耕に使用される鋤が非常に少ないのです。農耕に依存しない大規模集落には、食料もまた、交易によってもたらされたのでしょうか」（26頁）。ヤマト政権はヤマトエスタブリッシュメントと河内勢力が連合を組み、鏡等の威信財、さらには宋との朝貢の際にその除正を求めた將軍号の授与等で河内の米を確保したことでまず成り立つ

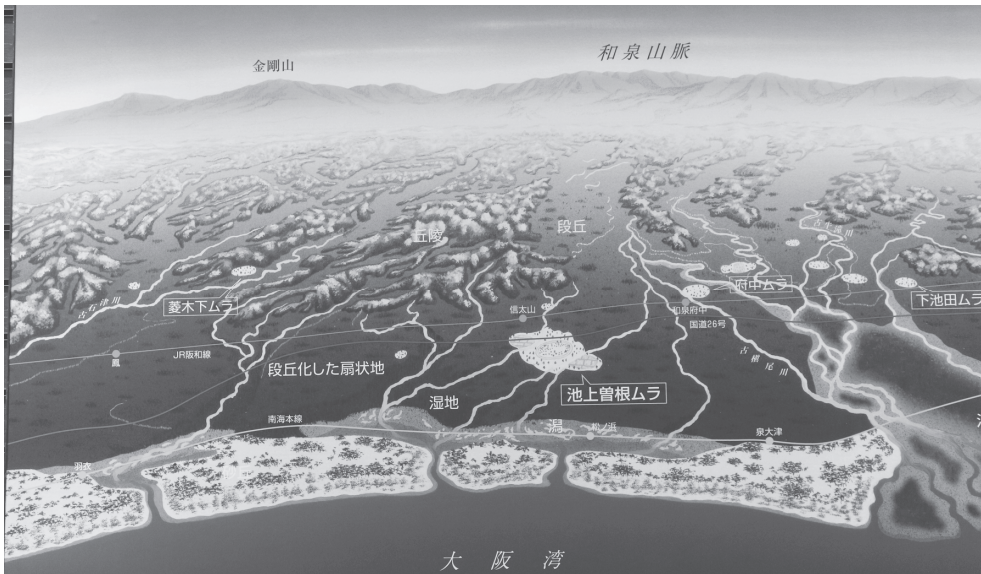


写真-5 大阪府立弥生文化博物館の展示パネル/筆者撮影

ていたのではないかと考えられる。さらに大和川から瀬戸内を通り、玄海灘から朝鮮半島東南部との外交権、貿易権を掌握することで鉄を確保できた成果も同様に大きいと考えられる。さらにヤマト王権が狗奴国と連合を組むことでもっと肥沃な濃尾平野を押さえることができたので、経済的基盤はさらに盤石なものとなったと想像できる。しかし、基盤産業の農業の実体、運輸力の実体は河内勢力が握っていたので、この連合の力関係はそのまま長期に安定的に持続できるものでないことも容易に想像できるであろう。ただし、古代国家にとってエスタブリッシュメントの権威は容易く崩せるものではないことも想像できる。

井上氏は「朝鮮半島のなかでも特に鉄器生産の遺跡や、鍛冶に関わる遺物が出土するような遺跡などから」、弥生土器、土師器、須恵器等の倭系遺物が見つかったのは、「何とか鉄資源を入手しよう、もしくは関連する技術を得ようという倭人たちの存在を示」（井上 [2018]、13 頁）しているとされている。しかし、倭のクニグニにとって鉄を入手する最も有効な交換財は米であったと想像される。こうした器も米の交換性を高めつつ利用したものではなかったかと想像される。倭国で最も鉄文明を取り入れられたのは奴国、伊都国の北部九州であり、このクニグニは先駆的に水田稲作に取り組み、その米と交換に鉄をえていたと考えられる。ヤマト河内連合もまた同様にだと考えられる。魏書弁辰条に弁辰の鉄が貨幣のように用いられていたと記されていたが、それは弁辰の鉄がよほど良質でかつ均質に近かったからだといえよう。しかし、鉄は決して貨幣にはならないのである。それは歴史が示していることでもあり、理論的にも鉄は貨幣にはなりえないのである。特定の財貨が広く交換を媒介することのできる根拠

を考えれば、その財貨が多くの人々によって需要されるゆえに、ひとまずそれを入手すれば、それを媒介に直接欲するものを得ることができると思惑が働くことにある。マルクスの価値形態論でいえば、共通等価物である。繰り返すことになるが、共通等価物は、その使用価値的性状からすれば、皆から必要とされるものであることからそれは生活必需品と考えられるのである。しかし、生活必需品は決して貨幣としての位置を占めることはできなかつたし、理論的にもできないのである。皆から必要なものと認知されるがゆえに共通等価物の地位をえやすいと考えられるが、交換を媒介するものとしては、まず価値として均質であり、価値としての保管性に富んでいなければならず、また分割・結合が可能なものでなければならない。交換で直接的交換可能性は通例、交換を求められる財に生じる。しかし貨幣は生まれながらに直接的交換可能性を具備していると社会的に共通して私念される。貨幣はこのような要件を満たさなければならないことから、金に固定されるのである。共通等価物が金に固定すると、貨幣は交換を媒介するものではなく、価値そのものとしてその入手が自己目的化される。商品所有者は直接その使用価値が自己の直接的欲望を満たす商品を手入するために所要商品を販売するのではなく、価値そのものと認められる貨幣の入手が自己目的化される。したがって貨幣が成立しているところは市場であり、交換が販売と購買に分離され、貨幣は価値物そのものとして購買手段＝価値尺度、それ自体致富欲の対象として富の蓄蔵手段として機能するのである。

朝鮮半島と倭との鉄の取引は国権レベルの交渉権、貿易権の下で、各共通等価物同士の鉄と米との交換として取引されたと考えられる。ヤマトエスタブリッシュメントが河内勢力をヤマト政権内に取り込まなければならなかったのは、大和川水系さらに瀬戸内、玄界灘の水運、その利権を押さえているだけでなく、肥沃な水田を後背地として確保することが同じように重要であったと考えられる。そしてこの水田は単に、ヤマト政権の食料供給地だけでなく、朝鮮半島の鉄ならびに先進的文化を手入するためにも絶対不可欠であった。「難波津」の候補地とされる大手前谷を北側に望む「法円坂倉庫群は『東西2列に並んだ計16棟』、『総面積1450平方^{メートル}』古墳時代最大級の倉庫群」で、「ある試算では、法円坂倉庫群にすべて刈り取った稲を入れた場合、副食等を含む1211人分の1年間の食糧にあたると言われ」（大阪府立近つ飛鳥博物館[2019]、40頁）ているが、この地にこれだけの倉庫群を作ったのは、主たる行先の一つが朝鮮半島であったことによると考えられる⁽¹⁸⁾。

そしてこのような関係がひとたび成立すれば、ヤマト政権が獲得した鉄は、倭国に持ち帰れば独占財となり、狗奴国、武蔵の地で有利な鉄との交換で法外に近い米を獲得し、その米がまた大量の鉄の獲得を実現し、規模は異なるが、大航海時代同様の商人資本的蓄積を実現し、これが巨大古墳造営の財源の確保を可能とし、先述の古墳への鉄製武器、武具、鉄製農具の埋納を可能にしたと考えられるのである。

大量の鉄製武器、武具、農具の埋納でもう 1 点明らかにしておかなければならないことがある。これら製品は当初はそのまま輸入したものと考えられるが、それを模倣した後、その地域内で量産されたと考えるのが自然であろう。ではどうやってそれが可能で、どこで量産されたか、この点を明らかにしておかなければならない。量産される際に輸入される鉄の形態は鉄鋌であり⁽¹⁹⁾、それを種々の鉄製品に加工する鍛冶工房が、この河内にあったはずである。またこの鉄製品の工人も渡来系の可能性が高いと考えられる。

大阪府の「埋蔵文化財情報」として発信された柏原市平野之大泉遺跡の調査報告 2 件がその手掛かりとなるので、古墳時代層に関する箇所のみを引用しておきたい。

まずは「平成 24 年 9 月から平成 25 年 3 月の調査報告」⁽²⁰⁾ から。

「今回の調査では、縄文時代中期から後期頃の流路、弥生時代の円形の堅穴住居、古墳時代の堅穴住居、掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）、井戸、土坑（どこう）、溝、鍛冶炉などを検出しました。

朝鮮半島を起源とするウマの歯や骨なども見つかりました。

おそらく、朝鮮半島から渡来した、先進技術をもった鍛冶技術集団の集落遺跡であったことがうかがえます」と。

次いで「平成 25 年 4 月から 9 月の調査報告」⁽²¹⁾ から。

「また、古墳時代前期から中期頃の鍛冶（かじ）関連遺構が見つかりました。操業後、廃棄（はいき）した状況がみられ、遺構のなかから、鉄滓（てっさい）やフイゴの羽口（はぐち）などととも、多くの石や遺物が出土しました。

中でも、ウマの歯や骨が多く混じって出土しており、鍛冶（かじ）遺構とウマとの関連が課題としてうかがわれます」と。

鍛冶炉で鉄鋌を溶かし、鋳型枠上の砂型に流し、さらにそれを研磨する工程で、腸扶柳葉式鉄鎌のように逆刺をつけているので、この鋳造、研磨も熟練を要すると思われる。また鉄鎌は矢柄とセットになっていて、矢柄とのセッティングにおいても、弓矢にはこの時代に殺傷力を高めるための工夫が施されたようである。松木 [2002] によれば、鉄鎌と矢の部分「木の皮で巻い」て結合させるが、この結合部分が緩いと、鉄鎌が命中しても鉄鎌が矢柄の方にめり込んで推進力が相殺されるので、この木の皮による数段に及ぶ巻き^{まち}閤を強めておく必要があり、松木 [2002] では楯塚古墳埋納の鉄鎌矢柄の武器としての効力の工場がこの時期にもあったことを説明されている（26 頁）。鉄鎌と矢柄との関係性は農具にも生かされ、例えば鎌とその柄との接合強化等農業生産力の向上に寄与したと考えられ、厚い分業体制がこの地に築かれ、こうした農工関係も河内勢力の生産力基盤となったのであろう。

さらにここで興味深いのは鍛冶遺構と馬の骨・歯が出土したことで、馬の飼育にもかかわっ



柏原市大泉遺跡出土品；鉄滓、羽口以外にも鉄鏃もみられる。
出典：近つ飛鳥博物館 [2019] 46 頁

ていたことである。四條畷市の菰屋北遺跡で馬埋納土坑が発見され、これを展示している大阪府立近つ飛鳥博物館の展示ガイドブック近つ飛鳥博物館[2013]には次のように記されている。

「馬の本格的な普及は、当時の戦いの道具にも大きな変化をうながし、騎馬戦に適した甲や挂甲や、馬を飾る馬具が普及するようになり、古墳の副葬品にも変化をもたらします。

大阪府内では、馬を飼育する牧の存在を示す資料が、四條畷市から寝屋川市にかけての一带や、池島・福万寺遺跡（東大阪市・八尾市）、長原遺跡（大阪府平野区）、八尾南遺跡などでみつかっており、河内湖をめぐる地域でまず馬生産が始められたことを物語っています。・・・

・・・このような遺跡からは、百済をはじめとする渡来人にかかわる資料も数多くみついています。初期の馬生産にはその飼育に必要な技術を携えた渡来人が大きな役割を果たしたと考えられます」（50 頁）⁽²²⁾。

5. ヤマトエスタブリッシュメント・河内勢力連合のパワーバランス

大和の地にヤマト政権が誕生し、河内に巨大古墳が造営されるまで、覇権は大和の地にとどめ置かれたと考えられる。覇権の根拠は何よりも軍事力で、次いで「卑弥呼の鏡」に代表される威信財の再分配による権威付けであったと考えられる。そしてこれを河内からみると、大和へのコメの供給拠点、中国大陸、朝鮮半島との物流拠点とされ、それは河内が大和に収奪されるという思いが募るところとなり、こうしたことが「応神のクーデター」を帰結させたと考え

られる。基盤産業の農業で考えると、パワーバランスは大和<河内であり、これを軍事力で考えるとパワーバランスは大和>河内であり、権威で考えるとエスタブリッシュメントの大和>河内と位置付けることができ、経済基盤の盤石さを有していれば、このパワーバランスは軍事力次第で如何様にも変化を遂げるものとなると考えられる。軍事力そのものについては、そのものの要素から考えると保有・使用できる武器の多寡にも大きく規定され、当時その武器の威力をも最も決するのは鉄であり、その鉄材=鉄錠の調達ルートを掌握し、それを武器として製造する鍛冶工房と基盤とする武器製造拠点がヤマト政権当初は大和の地に置かれていたと考えられる。それが先にみたように現柏原市の大県でも鍛冶工房の跡が残されているように、次第に河内にも置かれるようになり、規模も河内の方が大和より大きくなっていくのである。

和田萃氏は平成24年度八尾市史編纂記念講演会概要「河内・大和の物部氏—その興亡—」の中で次のように記されている。「物部氏は、ヤマト王権の武人集団で(、)・・・天理市の石上神宮付近を本拠とし(、)・・・大和の布留では、建物群、鞆の羽口や鉄滓等が見つかっていることから5世紀代に鍛冶や金属精錬、馬の飼育等を行っていたようです。同じ頃、河内の志紀の大県には伽耶や百濟から渡来した人々が住んでいました。おそらくそれが要因で、布留川上流域を本拠としていた物部氏が、5世紀後半段階に河内の渡来工人を支配下に置いて、河内と大和で製鉄や馬の飼育を行っていたと想像できます。そして守屋の段階で、本拠地を八尾に移したと考えています」⁽²³⁾と。

大和の布留川の扇状地に布留遺跡(天理市)があり、その周辺にいくつもの古墳群があり、そのなかでも「赤坂古墳群は布留遺跡の豪族居館などが存在する地位の南の丘陵上に位置する」。「赤坂古墳群の造営集団については、赤坂第17・18号墳の間の周溝から鞆羽口や鉄器の原料となる鉄塊、鉄滓が、赤坂2・4・6・9・20号墳から鉄滓が出土していることから、鍛冶に携わった工人との関りがうかがわれる。また赤坂第14号墳出土の韓式系の甕には、外面に鳥足文のタタキメがみられ、その造営者が百濟系の渡来人であったことを教えている」(天理大学附属天理参考館・天理市教育委員会[2021]、34頁、)。この企画展で展示されていた、この赤坂古墳出土の鉄塊、鉄滓、鞆羽口の写真-6を掲載しておく。

また、葛城地域連合の拠点葛城山麓には、寺口忍海古墳群(葛城市、約200基)、寺口千塚古墳群(葛城市、171基)、笛吹古墳群(葛城市、74基)、山口千塚古墳群(葛城市、約80基)、石光山古墳群(御所市、約100基)、巨勢山古墳群(御所市、約700基)等の群集墳が存在し、主たる古墳は5世紀中葉から6世紀中葉にかけて造営されたという(葛城市歴史博物館[2015]2頁)。その南側に位置する脇田遺跡から鉄滓と鞆羽口が出土し、「それらの棄てられた量の多さから、そこで操業規模の大きさを知ることができる」(葛城市歴史博物館[2021]、28頁)とされている。脇田遺跡以外でも、「寺口忍海古墳群では、5世紀後半～末のH-16号墳で鍛冶具、

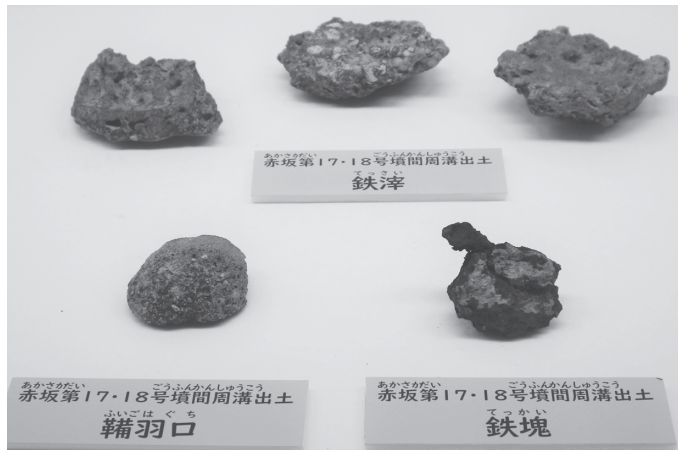


写真-6 天理大学附属天理参考館・天理市教育委員会第 87 回企画展
「物部氏の古墳 杣之内古墳群」、筆者撮影

6 世紀中葉の H-5 号墳と H-19 号墳で鑄造鉄斧が副葬され、そして 6 世紀後半以降の 8 基の古墳に鉄滓が供献されている（葛城市歴史博物館 [2015]、27 頁）たという。「さらに兵家 6 号墳（5 世紀中葉）と寺口千塚 15 号墳（6 世紀前半）」にも鑄造鉄斧が供献されていたという。鑄造鉄斧は鉄鋌同様、鉄材として朝鮮半島、おそらく百済か加耶から調達され、多くの渡来人技術者が鍛冶に携わっていたことが想像される。なお、鑄造鉄斧は「国内でも例の少ない」ゆえ、この葛城と朝鮮半島の鉄生産の濃い関係がうかがえる（葛城市歴史博物館 [2019]、19 頁）。また、二塚古墳から鉄鋌が出土していて、これは「5 世紀のものに比べて分厚く、付近の工房製品」（葛城市歴史博物館 [2019]、10 頁）と考えられている。国内で掘削された鉄鉱石、燃料がその主たる要因と考えられるが、5 世紀中葉から 6 世紀中葉にかけて、鉄製品加工は朝鮮半島から調達された鉄鋌、鉄斧を材料とするものが主流でありながら、6 世紀中葉ごろから国内産出された鉄鉱石から鍛冶した鉄を材料とするものが並行し始めた時期と考えられよう。ここでも葛城市歴史博物館展示の鉄滓等の写真-7 を掲載しておく。

写真-8 は柏原市立歴史資料館の展示物である。すべて市内大県遺跡より出土したもので、説明プレートには「これまで見つかった鉄滓の重量は約 500 kg、フイゴ羽口は約 1000 個」とあった。以上 3 か所の鉄滓を比較すると、大県の鉄滓の大きさが一目瞭然となる。大型の椀型鍛冶滓で、柏原市立歴史資料館 [2021] によると、「これは鍛冶炉の火窟（ほど・ほくぼ）の底にたまったもので、大型であれば、それだけ大きな鍛冶炉を使っていたと考えられる。大県遺跡では、長軸 15 cm 以上、厚さ 5 cm 以上の椀型鍛冶滓が見つかっており、他の遺跡の鍛冶滓と比べると非常に大きい」（17 頁）とされている⁽²⁴⁾。



写真-7 葛城市歴史博物館展示、鉄滓、鞆羽口、筆者撮影



写真-8 柏原市歴史資料館展示、鞆羽口、鉄滓、砥石、筆者撮影

柏原市教育委員会 [2003] では大県遺跡群の鉄滓の化学組成の分析がなされ、6 か所の遺跡別鉄滓 12 個の推定年代も記録されており、「5C 末～6C」が 2 個、「6C 中頃」が 1 個、「6C 後半」が 6 個、「7C 前半」が 2 個、「7C」が 1 個となっている (24 頁)。この「5C 末～6C」2 個の鉄滓は「大県 82-9 遺跡」から出土しており、注 (24) に記したように、この遺跡からの出土の大半が 6 世紀後半であることから考えると、大県遺跡群での鍛冶生産は 6 世紀後半がピークで、500 kg もの鉄滓、1000 個の鞆羽口が物語るのは、この大県遺跡群の鍛冶生産が国内最古級の奥坂製鉄遺跡 (岡山県総社市) と並ぶ鉄の生産拠点、鉄製品、したがって鉄製武器の供給拠点になっていたと考えられる。むろん、古市・百舌鳥古墳群での数々の鉄鋌埋納から、このような鍛冶以前に鉄鋌を材料とした鍛冶工房がこの地に築かれていたからこそ、6 世紀後半にもこのような発展を実現させることが、物部氏が多くと渡来系技術者を統率することによって可能となったといえよう。この点で考えると、5 世紀後半あたりから大県遺跡群は「大規模な

官営的鍛冶集落」(柏原市教育委員会 [2003]、15 頁)であり、有力な武器供給拠点であったといえよう。

先にみたように雄略は物部兵 30 人を派遣し、吉備下道臣前津屋一族 70 人を誅殺したと日本書紀に記されていた。また同じく日本書紀で雄略は大伴室屋と東漢掬直に遺言を残し、吉備稚媛と星川皇子を殺害し、大伴金村の代には住吉に居を構えていた。このように雄略の代になると河内勢力が軍事力とそれを担い、かつそれにとどまらず権力を維持するうえで必要な技官(テクノクラート)を渡来人から多く登用しながら強力化し、大和とのパワーバランスは大きく崩れ、もはや大和と河内のパワーバランスはこの 2 極構造では保てない臨界に、清寧、武烈亡き後に達したと考えられる。

このようなパワーバランスが崩れ、粛清が繰り返されるなかで、アリ山古墳のような 77 本の鉄刀、48 本の鉄槍先、1612 個の鉄鏃、36 キロの鉄鋌の「供献」が出来たと考えられるのである。河内勢力は専制王雄略の死後弱体化したとも考えられようが、雄略がなくなっても、河内の軍事力は残っていたであろう。チトー亡き後の旧ユーゴスラヴィアのようにカリスマが亡くなれば、カリスマによって維持された秩序も崩壊するので、雄略亡き河内、大和も同様にかって混乱・混迷を深めたことも否定できないと考えられる。この複雑に崩れたパワーバランスを立て直すには、もう 1 極の勢力をヤマト政権内に導入する以外に方法はなく、そうした修復を図ったのが、継体の即位ではないだろうか。

6. 継体即位の歴史的位相

507 年に樟葉宮で即位し後、継体は 511 年に山背の筒城(京田辺市)に、また 518 年に同じく山背の弟国(長岡京市)に遷都する。そして 526 年に磐余の玉穂(桜井市)に宮を遷し、漸く大和入りを果たした。即位して 20 年もの間、大和入りをためらったのか、あるいはヤマトの一定の勢力がこれを拒み続けたのか、即位してもヤマト政権の一定の勢力との緊張関係が続いたと理解されよう⁽²⁵⁾。しかし、ヤマト政権内に継体勢力を取り込み、ヤマトエスタブリッシュメントと河内勢力との 3 極の勢力均衡が実現するのに 20 年を要したといえるのではないだろうか。

均衡ある天下三分を形成するための継体勢力の必要条件は、河内勢力をけん制できるだけの力(軍事力、経済力)を有すること、ただし雄略のように軍事力を持ち・行使し過ぎることは他の 2 極から警戒される。河内勢力をけん制するほどほどの程度が望まれる。またヤマトエスタブリッシュメントの権威を損なわないこと、そこにはここに加わった河内勢力の王朝としての権威も含まれる。継体勢力にはヤマトエスタブリッシュメントにとっては警戒すべき尾張、

淀川水系の勢力があり、またそうでありながらヤマトエスタブリッシュメントと河内勢力の両方に足場のある大伴、物部等のテクノクラート諸勢力も内部に対立関係を含みながら、入り組んでいるので、3極の勢力均衡の実現は容易とはいえない。というより均衡はたえざる不均衡化の中で一時的に達成できるものでしかないのかもしれない。当時事態はさしせまっていた、後先のことより、この2極の抜き差しもできない現状を打開できる可能性を探り、その手を打つことで、それはいま述べたように新たな第3極の勢力を組み入れ、勢力の均衡化を図ることを選択せざるをえない現状にあったのではないかと考えられる。

(1) 継体の指示勢力

継体の勢力範囲といっても、(α) 継体あるいはその一族が築き、拡大した勢力圏もあれば、(β) 継体を神輿として担ぎ上げて築かれた、拡大した勢力圏もあるであろう。(α)の場合、継体自らの野望で築いた勢力圏もあるであろうし、また一族で築いた勢力もあろう。(β)の場合は婚姻関係が重要となろう。とはいえ、当時の婚姻関係は筆者にとって全く実感できる代物ではない。さらにこの(α)、(β)を明らかにするためには系譜を読み解く必要があるが、筆者にはその素養がないので、ここではこれ以上の努力を放擲したい⁽²⁶⁾。

継体の出自からすると、父、彦主人王が居住した「近江国高島郡三尾別業」(琵琶湖の北西)に「越前国三国」⁽²⁷⁾から振媛を娶り、そこで継体は生まれ、幼少時に父が亡くなったのち、三国で育ったと日本書紀は伝え、「天皇」としてのお迎えは古事記では近江となっているが、日本書紀では越前となっている。複数の姻戚関係から考えると、継体が「天皇」として迎え入れられたのは近江近辺からと考えた方が妥当だと考えられる。近江だと美濃、尾張とも、琵琶湖・宇治川を通して淀川水系とも身近となる⁽²⁸⁾。

継体の妻は古事記では7名、日本書紀では9名が記され、日本書紀で考えると、手白髪皇女はヤマト政権への入り婿としての組み入れで、尾張連草香女、目子媛との婚姻で、尾張熱田を支持勢力とすることができ、また茨田連小望の娘関比売との婚姻から淀川水系の勢力を支持勢力とすることができた。さらに出身地の近江からは4名の妻との婚姻関係から相当大きな支持勢力をえていたと想像される。

また即位に関して、日本書紀では継体を推戴したのが大伴金村、物部鹿鹿火たちで、継体がいったん辞退した後、継体と金村両者の知己である河内馬飼荒籠がさらに説得したことが記されている。この点から考えると、淀川水系と連動して北河内で馬匹生産に携わる勢力をも支持勢力としていたと考えられる。

篠川氏は「連姓氏族を代表する大伴・物部両氏が、金村・鹿鹿火が継体の即位を支持したことを契機に成立したウヂと考えられる」(篠川 [2016]、116 頁)とされている。雄略の時代に

「杖刀人・典曹人の統率者として」仕えていた大伴氏・物部氏（篠川 [2016]、119 頁）等テクノクラートを大連として自己の勢力の下に再編し、氏姓制を整え、官僚を自己の支持勢力とすると同時に、彼らテクノクラートによって天皇自体も管理できる体制がつくられていったとも考えられる。

日本書紀「磐井の反乱」では近江毛野臣が「兵 6 万」を率いて任那に派遣し、新羅に占領された南加羅等の奪還をもくろむも、筑紫国造磐井の反乱に合い、毛野臣は前進を阻まれたことがまず記されている（宇治谷 [1988]、358-359 頁）。この記述が史実通りであれば、継体は近江の勢力を使って 6 万の兵を任那に派遣するほどの軍事力を有したことになる。

このように整理すると継体は、尾張の農業生産力、淀川水系の水運力、海軍力、農業生産力、さらには北河内の馬匹生産とその知識、さらには優秀な渡来系を含む軍官・技官・文官テクノクラートをその支持勢力に持ち、ヤマト政権で十分な第 3 極を形成し、大和入りしたと考えられる。

(2) 3 極の均衡化

叙上十分な第 3 極と記したばかりであるが、近江毛野臣が 6 万の兵を率いて任那に派遣させるほどの軍事力の行使は天下 3 分の計から考えるとオーバープレゼンスのように考えられる。近江勢力による政権篡奪理解にもなりかねない。実際に磐井の乱を鎮圧したのは近江毛野臣の軍ではなく、物部麁鹿火等が率いた軍であり、その後南加羅等の奪還の任も成就せず、毛野臣は帰還途中対馬で亡くなり、亡骸は船で枚方まで運ばれた。近江毛野臣に関するこのような記述が残されているのは、継体朝が政権篡奪を図ったものではないことを暗示することをその意図としているからではないだろうか。

また、5 世紀後半雄略没後に、「王権の武器庫」は桜井市忍坂から天理市石上に、つまり大伴氏から物部氏に移り、その下で物部麁鹿火が「王権の武器」を用いて、磐井の乱を鎮圧したと考えられる。天皇の直轄というより、軍事テクノクラートが武器を管理し、軍事力を行使していると考えられるのである。継体が任意で選んだ近江毛野臣が率いた軍ではなく、すでに「王権の武器庫」を管理するテクノクラート物部氏と大伴氏が天皇と合議の上で、物部麁鹿火と大伴金村が率いた軍によって鎮圧された事例として磐井の乱が考えられるではないか。「王権の武器庫」をテクノクラートが専ら管理することによって、任意の軍事力行使もある程度防ぐことができ、パワーバランスにその分効果が期待できたと考えられる。

そして日本書紀では磐井の子葛子は糟屋屯倉を献上して死罪を免れたと記されている。そして磐井一族が殲滅されずにその後国造として任じられることは、国造制の端緒となり、地方支配の進展を図るものとなったといえよう。

篠川氏は「王統が一つの血統に固定化されるのは、・・・6世紀ごろの欽明・敏達朝（結果的には継体に遡る）と考えられる」（篠川 [2016]、117 頁）とされている。最後にこのことを考えておきたい。継体の後、天皇は安閑、宣化、欽明に引き継がれる。しかし、注（4）で記したように、「継体から王位を譲られた安閑（は）、継体の崩後たちまちに殺害されたり」（水谷[2001] 191 頁）く、宣化は一世王で、欽明に継承され、欽明後に敏達、用明、崇俊、推古の順に継承されていった。王統が欽明に引き継がれた理由を考えると、安閑、宣化の母は尾張連香草日子媛で、欽明の母は履中の孫の仁賢と雄略の孫の手白香皇女である。つまり母親の血統で尾張系よりも履中と允恭の血統を重んじたから欽明からの王統が選択され、選択したのはヤマトエスタブリッシュメントならびに河内勢力である。

敏達は石姫皇女（仁賢の娘の橘仲皇女と宣化との娘）、用明と推古は堅塩媛との子で、崇俊は小姉君との子である。堅塩媛と小姉君は蘇我稲目の娘である。日本書紀によれば崇俊は馬子の手の者に殺害され、王位は推古に引き継がれるも、推古は聖徳太子の薨去後皇太子を立てなかつたことで、王位は敏達の孫の舒明に継承され、以降王統はこの舒明系となる。もちろん、この間に蘇我による物部討滅、また皇極の治世には入鹿による山背大兄皇子一族殺害、乙巳の変、さらにその先には壬申の乱が続き、とても安定した治世とは考えられないが、継体—欽明—敏達…舒明と、継体を起点とする王統がつくられることとなり、皇女への婿入りだけでは王位継承は実現できず、特定の父系に限定されるものとなり、姻戚を通しての権力接近に一定の制約が設けられ、混乱の出来をある程度予防することが可能、あくまでも可能となった。その事実上の起点が近江出身の継体となったのである。

継体の即位自体は、王統がいまだ特定の血縁関係によって固定されていなかったから実現されながらも、そこを起点に特定の血縁関係で王統が形成されるようになった。畿外の近江出身の前王とのつながりを持たない継体が起点となる万世一系といってもそれは形容矛盾である。そこで持ち込まれたそれ自体怪しい「応神五世孫」も、その基の応神自身が特定の王を引き継ぐものでなく、すでにみたように王位後継者と考えられる忍熊王を滅ぼすことによって王位を篡奪したのであり、王権の篡奪と万世一系は両立できるものではないことに言葉を要する必要はない。

最後に、樟葉宮で即位して大和入りするのに 20 年を要した点について推理しておきたい。第 3 極を形成して、政権の安定を図るために継体勢力を政権に組み込んだのだから、3 極「均衡」は構造的には 3 極各が地理的距離を保つ必要があろう。また継体の支持勢力を姻戚関係からみた場合、茨田連との姻戚関係は最も後になって築かれたので、第 3 極をなす淀川水系の地盤確保にも時間がかかるものとなり、この水系内 2 度の遷都も地盤固めに必要だったのでないかと考えられる。そして自身の年齢的な制限もあって、地盤固めにもめどが立ち、頃合いとみて大

和入りに踏み切ったのではないだろうか。

(1) その記録は『専修大学社会科学研究所月報 637・638 2016年8月』に掲載されている。

<http://www.senshu-u.ac.jp/~off1009/PDF/160820-geppo637,638/smr637-miyazaki.pdf>

(2) 水谷千秋氏は「系譜上こそ仲哀と応神は父子となっているが、実際は応神の父は住吉三神といえるであろう。かれは、住吉三神が神功皇后に生ませた『神の子』と解釈される」(水谷 [2001]、18頁)とされている。

(3) http://www.city.takatsuki.osaka.jp/rekishi_kanko/rekishi/rekishikan/daio/kodairekishikan/imashirozukakofun/1327496276409.html

(4) 水谷氏は継体の崩年について日本書紀には、この531年(辛亥年)以外にも534年(28年由崩崩)との伝えを異例の注記として残していることを紹介している。「百済本記」の「辛亥」の年に「日本天子太子皇子 俱崩薨」と記され、これは継体が亡くなったと同時に太子皇子(長子の安閑と考えられる)の死も伝えるものといえよう。この点に関しては拙稿末尾で触れることとしたい。

(5) http://www.city.takatsuki.osaka.jp/rekishi_kanko/rekishi/rekishikan/daio/kodairekishikan/imashirozukakofun/1327498932196.html

(6) 1912年にこの後円部頂で堅穴式石槨とこの長持形石棺が発掘され、これらは陵墓参考地に指定され、今は見ることはできないが、発掘調査に携わった大道弘雄氏の調査論文では「約1斗余」、宮内庁御物では「約20リットル」の朱が残されていた(新開 [2002]、9頁、ならびにそのディスカッション記録129-130頁)。

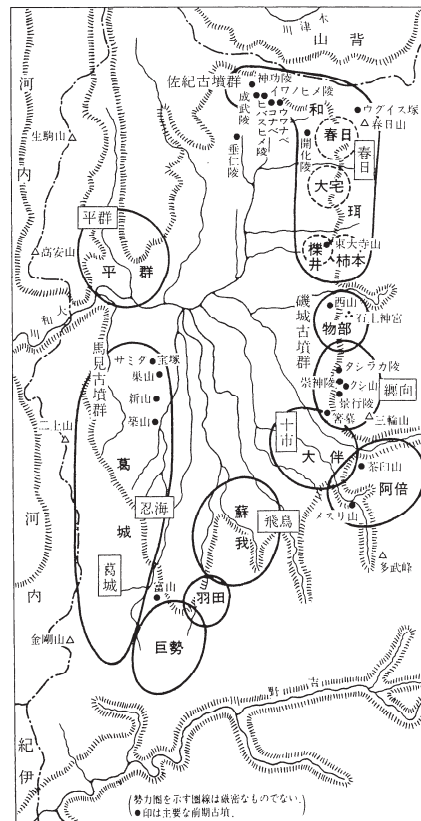
(7) 藤井寺市教育委員会事務局 [1999] 156頁、質疑応答の中での白石太一郎氏の発言

(8) 今の和歌川は河口が堺市と大阪府住之江区になっていて、それは江戸期に付け替えが行われた結果で、この5世紀、6世紀では前掲図-2のように玉串川、長瀬川、平野川に分岐し、各河内湖に流れていた。

(9) 本拙稿で河内勢力と記す場合、全て和泉を含めている。

(10) 考古学、古代史の門外漢である筆者にとって、この古墳時代の国家についての理解の基本的枠組みには、使用している用語から瞭然のように白石太一郎氏の多くの労作に負っている。一知半解の恐れが十分であると認識しているので、確認のため、筆者のヤマト政権・ヤマト王権解釈を記しておくことにする。

白石 [2013] には端的に次のように記されている。「私はここまでの講義でも、三世紀中葉に邪馬台国連合と狗奴国連合の合体によって成立した広域の政治連合を『ヤマト政権』、その中枢を担った畿内に基盤をおく政治勢力を『ヤマト王権』と呼び分けてきた」(158頁)。ここで他の著作から正確性を担保しておきたい。まず、ヤマト政権はこの狗奴国連合だけでなく、「北と南をのぞく日本列島各地の連合体、すなわち広域の政治連合」(白石 [1999b] 72頁)であり、この「汎列島の」連合には「南島や北海道・東北北部は含まれて」おらず、具体的には「九州の勢力、あるいは吉備の勢力、あるいは東国の勢力、出雲の勢力など」(白石 [1999a]、107頁年)が含まれていたと考えられている。そしてこの政治連合の目的については「それまで玄界灘沿岸地域が独占していた、鉄資源をはじめとする先進



注図 ヤマトの豪族分付図

出典：大橋 [2007]、152頁 図44

的文化的入手ルートの支配権の奪取を目的（に）・・・形成されたもの」（白石 [1999 b] 78 頁）と記されている。ヤマト政権を構成した主な勢力はヤマト王権と白石氏があげている地方の大王級の豪族たちで、ヤマト王権の構成はおおよそ、注目のヤマト豪族であり、吉備等の地方豪族も含めてこれらを本拙稿ではヤマトエスタブリッシュメントと呼んでおきたい。

また白石氏はヤマト王権の範囲については次のように記されている。「ヤマト王権の地域的基盤というかその原領域が、畿内でも南部の大和川水系およびその周辺、すなわちのちの大和・河内・和泉の地域であり、畿内でも北部の淀川水系の摂津と山城の地域は含まれていなかった」（白石太郎 [2013]、159 頁）と。

ヤマト王権の原領域として「畿内でも南部の大和川水系およびその周辺、すなわちのちの大和・河内・和泉の地域」と位置付けられている点について、「大和」と「河内・和泉」との間の権力構造について学説整理をされ、「墓域移動説」と「河内勢力勃興説」に大別したうえで、後者について「河内勢力王権奪取説」とご自身の「ヤマト王権内部での盟主権の移動説」に区分されている（白石 [1999a]、105 頁）。門外漢で僭越なことは十分承知したうえで、提起させていただきたい。「大和」と「河内・和泉」の関係を典型的に示しているのが、「河内・和泉」勢力の「大和」勢力への「入り婿」だと考えられる。この関係は政略であり、野合であり、妥協の産物である。両者が妥協し、野合するのはまず力関係がある程度均衡し、両者が野合しなければならないのは、両者とも野合側に自身にはなく、自身にとって絶対不可欠なものを見出しているからだと考えられる。「大和」にとっては「河内・和泉」の農業を基盤とした経済力と朝鮮半島までの水運力であり、「河内・和泉」にとっては「大和」のエスタブリッシュメントとしての権威と中国との冊封関係ならびにその下で授けられる権威である。しかし、この野合は両勢力の力=軍事力関係次第で常に不安定化せざるをえず、雄略治世の下でこの不安定性は最も顕わになったと考えられる。したがって両者の権力関係は奪取、(秩序立てられた) 交替、移動という固定化されたものでなく、ゲバルトが幅を効かす流動的なもので、スタビライザーがビルトインされておらず、継体が第 3 極としてその役割が期待されたのではないかと想像される。

(11) 塚口義信氏は「4 世紀の後半にヤマト政権の最高首長権を掌握していたのは佐紀西群の政治集団であり、その後継者を象徴したのが、香坂王と忍熊王」と考えておられる。塚口 [1993]、105-106 頁。

(12) 岸本直文氏はこれをクーデターとして次のように述べられている。「サキ政権の時代に、半島派兵にあたって、河内・和泉が前線となりました。ホムダワケ（応神）は、佐紀から送り込まれた王族だろうとみえています。ホムダワケは、佐紀政権下の四世紀後半、河内でそうした任務に従事し活動する、それによって、古市先生がおっしゃったように、葛城とか吉備とかそういう地域勢力と関係を深く結ぶようになる。そうした権力基盤を作り上げた上で、佐紀の王統を倒すクーデターを起こし、権力を奪取したと考えています。塚口先生はこれを『四世紀末の内乱』と表現しています。そして、河内が王権の本拠地になる」と。

(13) 塚口氏は「四世紀末の内乱」で勝利した応神の支持勢力として、葛城氏、応神が娶った日向泉長媛、仁徳が娶った髪長媛の出身の日向の豪族、湖北の集団、河内の誉田（コンダはホムダの訛った言葉）付近に拠点をもったホムダノマワカ王の一族をあげ、「応神の名のホムタも、幼少からの名ではなく、誉田の地にやってきてから付けられた名であると考えたほうが、より説得的である」とされている。塚口 [1993]、117-121 頁。

(14) 允恭陵の陪塚、唐櫃山古墳と長持山古墳の石棺には先に記したようにピンク凝灰岩も用いられていて、この期にこの石材が大王墓に用いられていたと考えられるならば、この陪塚は允恭に近いものが葬られていたと考えられ、允恭陵の南側に存在していたと伝えられる御曹司山古墳も含めて、いずれかにこの悲恋で自殺した兄妹の古墳があったかのようと思われる。御曹司山古墳については古市古墳群研究会 [1985] 54 頁を参照した。

(15) 『広報ふじいでら』第 397 号 2002 年 6 月号、
<https://www.city.fujidera.lg.jp/soshiki/kyoikuiinkai/bunkazaihogo/koramukodaikaranomemessezi/sisinatosomegutte/1387441967368.html>。

(16) 北野 [1976]、79 頁、詳しくは第二列の 11 号短甲付近に鉄鋌破片 15.35 キログラム（59 頁）、第四列における刀剣群に 129 枚（76 頁）もの鉄鋌が副葬されていた。

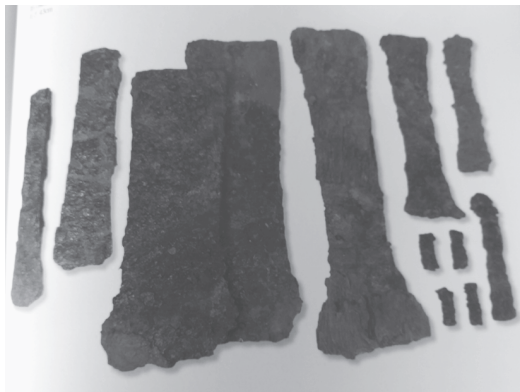
副葬鉄鋌に関しては、佐紀古墳群のウナベ古墳の陪塚と考えられている大和 6 号墳（今は消失墳、主墳のウナベ古墳の造営は誉田御廟山古墳とほぼ重なる時期になっている）からも大小の鉄鋌が 872 枚に出土した。これを保管している宮内庁では HP 上で「出土した鉄鋌の総重量は約 140 kg に及ぶと推定され

ている。鉄鋌は、朝鮮半島で製作されたものと考えられており、それ自身が鉄素材であるという説や、あるいは権威を示す宝物としての性格が考えられている。残りの良い個体は、現在でも磁石がつくほどであり、細部の形態や製作技術痕を明瞭に確認できる」としている。釜山の福泉洞博物館の展示の中に鉄鋌があり、展示図録からその写真を添付しておきたい。



大和 6 号墳に埋納された鉄鋌

出典：<https://www.kunaicho.go.jp/culture/shoryobu/syuzou-r10.html>



福泉洞 11・22 号墳に埋納された鉄鋌

出典：『福泉洞博物館展示図録』151 頁。

この図録の同頁には以下のように記されている。

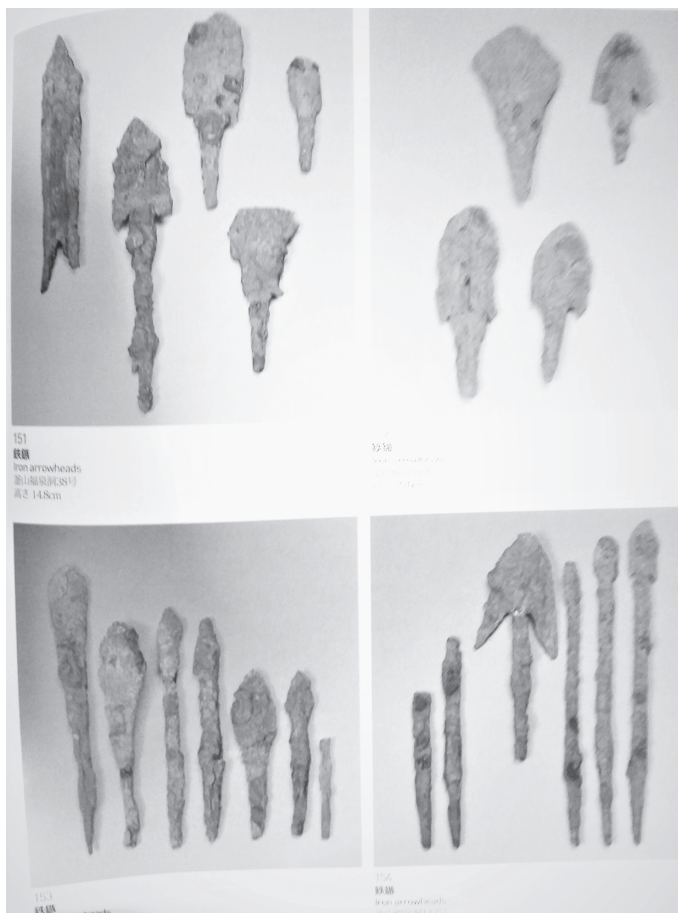
「伽耶で鉄生産が一般化されたことを示す遺物は、鉄器制作時の中間段階の製品である広い鉄板形態をなす鉄鋌であるが、このような鉄鋌は 4～6 世紀の釜山と金海地方の大型古墳で多く出土する。鉄鋌を墓に納めるときは 10 個ずつ縛って棺の下に敷いたが、鉄がその当時の最も主要な財源であったことを勘案すると、このように多量の鉄鋌を墓に入れることは死者の富と権力を象徴するものとみることができる。福泉洞古墳群ではこのような鉄鋌が 4 世紀中葉から出土しはじめて 5 世紀代に最も流行して 6 世紀初めには見られなくなる」と。

なお、福泉洞 43 号墳に設けられた石槨のレプリカの展示の写真をここに添付しておく。中央右に鉄鋌が置かれている。



写真真-1 福泉洞 43 号墳石槨：筆者撮影、2017 年 3 月 16 日

(17) 田中晋作氏も、「朝鮮半島情勢との対応」も考えてこの武器の開発、生産を考えておられる。福泉洞博物館展示図録では「槍と矢は戦術の変化に伴って発展する。つまり戦闘にウマが用いられるとともに槍の柄は長くなり、鏃も射程距離を伸ばすためにさらに幅が狭く茎部が長くなる形態に変わる」(148頁)と説明されている。展示された鉄鏃の写真を貼付しておく。すべて福泉洞古墳出土のもので、時系列で考えると右上→左上→左下→右下への変遷だと考えられ、鏃身は 10.6 cmから 17.9 cmに長伸している。田中氏は「古市・百舌鳥古墳群の勢力」の古墳時代中期の鉄鏃が「15~16センチの定型化した」ものと考えられている。この定型化は朝鮮半島では騎馬向けに開発され、生産されていたものが、この河内に持ち込まれ、定型化したものと考えられる。馬用に開発された鏃故、その殺傷能力は高かったと考えられるし、また朝鮮半島への出兵も想定されていたのかもしれない。



福泉洞古墳群の出土鉄鏃

出典：福泉洞古墳群博物館 [2012]、157頁

(18) この法円坂が仁徳の難波高津宮の候補地に考えられている。



写真真-2 法円坂倉庫群の復元；大阪府立近つ飛鳥博物館展示、筆者撮影

(補注) 倭米が鉄との交換財となりえた理由は倭米の比較優位にあったと考えられる。その根拠は日本列島の成立ちにあつて、3つのプレートの衝突による地殻変動によって、山地が2000メートル、3000メートルにも発展し、それらが温帯でありながら多雨多雪をもたらし、山が貯めた水が今でも米の旨さを生みだしている。

(19) 井上主税氏は、「朝鮮半島で鉄鋌が出土している遺跡は、東南部の加耶や新羅の地域に集中」し、いずれが倭への供給拠点になっていたかについては、堺市文化観光局文化部文化財課 [2018] での質疑応答の中で次のように述べられている。「野中古墳、もしくは南山4号墳(奈良県橿原市)から出土した鉄鋌ノ形状を見ますと、…どちらかという、釜山や金海(きめ)のほうであったり、南部では阿羅加耶の咸安という地域などで似たような鉄鋌が確認されたりしているので、やはり朝鮮半島東南部との関わりがあると考えています」井上 [2018]、90頁)と。

(20) <https://www.pref.osaka.lg.jp/bunkazaihogo/maibun/oogata24-1.html>

(21) <https://www.pref.osaka.lg.jp/bunkazaihogo/maibun/ogata25-3.html>

(22) 注朝鮮半島からの鉄の導入は同時に鉄製品の製造にかかわって多くの渡来人を招き、また馬の導入普及でも同じことが生じた。鉄、馬、渡来人にまつわるこの動向は東アジアの激動の中で生じ、このこと自体がヤマトエスタブリッシュメント・河内勢力連合を促したものとイえるので、簡単に東アジアの激動を整理しておきたい。渡来人の多くは百済からと考えられる。百済の建国は4世紀前半と考えられているが、341年に鮮卑の前燕が高句麗の都を陥落させ、高句麗はこの失地の挽回を建国したばかりの百済への南進で果たそうとし、ここで倭が援軍を派遣し、百済の肖古王が倭に七支刀(天理市布留の石上神社保管)を贈り、「これが朝鮮半島に対して、倭が百済に加勢して出兵したことに対する感謝を込めて百済から贈られたと解釈できる」(北野 [2000]、113頁)と考えられる。

さらに4世紀終わりには広開土王による百済侵攻により、いったん百済は高句麗に降伏するも倭との同盟を結び、倭は新羅に侵攻し、ここで広開土王は新羅を救援し、倭軍と戦乱を交える。そして広開土王の子長寿王が475年に百済の王都漢城を攻撃し、百済は熊津に遷都せざるをえなくなり、こうした百済の度重なる危機が渡来人を倭にもたらす要因にもなったと考えられる。高句麗が鮮卑の騎馬戦を早い時期から導入し、この高句麗との戦いに百済が倭に援軍を求める図式の中で、鉄のみならず馬も日本にもたらされたと考えられよう。

(23) <https://www.city.yao.osaka.jp/cmsfiles/contents/0000021/21939/H24kinenkouen.pdf>

(24) 写真の柏原市立歴史資料館展示物は柏原市立歴史資料館 [2021] から大泉 82-9 遺跡のものと考えられる。柏原市教育委員会 [2003] ではこの大泉 82-9 遺跡出土の椀型滓の推定年代を「5C末～6C」(24頁)としているが、資料館の説明プレートも「古墳時代後期」、柏原市教育委員会 [2003] では「6世紀後半」と記されている。また、砥石の出土に関して柏原市教育委員会 [2003] では「鍛冶工程の最終的な仕上げまでを遺跡内で行っていたことがわかる」と記されている。

(25) 葛城氏は広大な葛城山麓を拠点とした葛城地域連合であり、雄略が討滅した葛城は山麓南部の「玉

田宿禰系」であり、北部の「葦田宿禰系」からは「のちの飯豊皇女や顕宗・仁賢・武烈の諸天皇が輩出し・・・葦田宿禰系の葛城氏はなお隠然たる勢力を持っていた」（塚口 [1993]）ことを踏まえ、水谷氏は「継体が現れる直前まで、仁徳系王統と葛城氏との関係はつながっていたのだ。両者が結託して、新王統の成立に抵抗した可能性は十分考えられるだろう」（水谷 [2001]、137 頁）とされている。

ここでも門外漢ながら提起させていただきたい。逆に葦田宿禰系葛城氏（第1極）が河内勢力（第2極）を抑止・抑制することを目的に継体勢力（第3極）をヤマト政権に組み込んだとは考えられないだろうか。結果的に考える王家は次のような系譜となる。継体の子宣化天皇は、履中天皇の孫したがって葛城磐之媛命の曾孫の仁賢天皇の娘橘皇女を娶り、その娘石姫皇女は欽明天皇との間に敏達天皇を産み、敏達の子押坂彦人大兄皇子は糠手姫皇女との間に舒明天皇を産み、舒明と皇極との間に中大兄皇子と大海人皇子が生まれるので、この王統は父系として継体を起点に形成され、母系として葛城氏の系統をひくものとなっている。もちろん結果論でしかないが、河上邦彦氏は「押坂彦人大兄皇子の成相墓は牧野古墳である蓋然性が高い」（河上 [2006]、87 頁）と記され、この古墳は馬見丘陵中央部に造営された直径約 60 メートルの円墳（73 頁）であり、いうまでなく、馬見古墳群は葛城氏の奥津城である。

(26) とはいえ、ことに応神、継体まつわる息長氏の諸系譜については疑念が拭えなかつたし、その真意ももちろん究明できなかつた。まず、応神の母が息長足姫尊で、すでに記したように神功はその実在性自体が問われる。その応神の妻の一人の弟姫（息長真若中比売）は応神との間に若野毛二俣皇子を産むも、この皇子が娶るのは息長弟比売真若で、そうなるこの若野毛二俣皇子は母を娶ることになっている（補注）。さらにこの皇子の四世孫が継体であるが、継体は息長真手王の娘、麻績娘女を娶るが、継体の孫の敏達が娶る広姫の父も息長真手王であって、大橋 [2007] が記しているように「所伝上の混乱・未整理が露見しており、作為の過程がうかがえる」（150 頁）といわざるをえない。

（補注）この若野毛二俣皇子と息長弟比売真若の子が「太郎子」で、継体の曾祖父である。むろん実名ではなく、『上宮記』「一言」では「一名意富々等王」、「応神記」では「意富富杼王」、ともにオホホトで、これは継体（袁本杼、男大迹、乎富等）ヲホトに対応した名になっていて、それだけ作為が感じられる。この点について室賀寿男氏は次のように記されている。「オホホトという命名は『大ホト』の意であって、『小ホト』（ヲホト、すなわち男大迹で継体天皇のこと）に対しており、本来的にはヲホトの兄にあたるものに者につけられる名である。だから、継体の曾祖父につけられるべき名ではない」（室賀 [2014]、24 頁）。「応神五世孫」を作った系譜の不備はこの注（26）だけで4つも数える。曾祖父名をまず「太郎子」と表記する大胆さをカウントすれば5つになる。筆者からみれば、「応神五世孫」自体も怪しい。

(27) 社研の今回の実態調査との関係でいうと、有力な北前船寄港地であったが、今回時間の都合で、残念ながら調査地対象外となった。

(28) 先述のように、5世紀末には鉄鉱石による鉄の鍛冶が始まったこととの関連でいえば、高島の磁鉄鉱が注目される。室賀氏は「山尾幸久氏も…近江北部の近江北部の浅井・高島郡の磁鉄鉱に関する『続日本紀』の記事を示し、この鉱物資源が5世紀後半くらいから採鉱されたとみる丸山竜平氏の見解も併せて、古代近江の最大の特色は製鉄の国であり、鉄生産が継体天皇の即位の背景として考えられ」ていることを紹介し、「私としてもほとんど異存がない」（室賀 [2014]、46 頁）と記されている。

別の視点からみると、大泉遺跡出土鉄滓の化学組成を分析された大澤正己氏は「原料鉄はやはり『近江の鉄』が想定できそうである。…琵琶湖周辺には古橋遺跡の6世紀～7世紀初頭を遡る製鉄遺跡は検出されていないので問題は残る。今後6世紀代の製鉄遺跡が近江の国から発見できるのを期待する次第である」（柏原市教育委員会 [2003]、21 頁）と記されている。

近江の鉄の重要性には大いに注目されるところと考えられる。しかし継体の経済的基盤をなすものとして近江の鉄を位置付けるのには、現在の遺跡状況の下では時期的に無理があるように考えられる。

引用・参考文献

- 井上主税 [2018] 「5 世紀の朝鮮半島情勢と鉄素材からみた百舌鳥・古市古墳群」、堺市文化観光局文化財課 [2018] 『海を渡った交流の証—遺物からみた5 世紀の倭と朝鮮半島—』所収。
- 井上光貞 [1965] 『日本古代の氏族と天皇』、岩波書店。
- 宇治谷孟 (1988) 『全現代語訳日本書紀』、講談社学術文庫。
- 大阪府立近かつ飛鳥博物館 [2019] 『ヤマト王権とその拠点—政治拠点と経済拠点—』。
- 大橋伸弥 [2007] 『継体天皇と即位の謎』、吉川弘文館。
- 柏原市教育委員会 [2000] 『古代たたら（製鉄）とカヌチ（鍛冶）—記録集—』
- 柏原市教育委員会 [2003] 『大県遺跡群分析調査報告書』。
- 柏原市立歴史資料館 [2021] 『日本書紀と柏原』。
- 葛城市歴史博物館 [2015] 『古代忍海の渡来人を探る—葛城市寺口忍海古墳群—』。
- 葛城市歴史博物館 [2019] 『発掘 葛城山麓の古墳—奈良県立橿原考古学研究所附属博物館蔵品里帰り展』。
- 葛城市歴史博物館 [2021] 『発掘 葛城山麓の集落遺跡』。
- 河上邦彦 [2006] 『大和葛城の大古墳群 馬見古墳群』、新泉社。
- 岸本直文 [2018] 「倭の五王と百舌鳥・古市の巨大古墳」、堺市文化観光局文化財課編 [2018] 『倭の五王と百舌鳥・古市古墳群—東アジアからみた巨大古墳—』所収。
- 北野耕平 [1976] 『河内野中古墳の研究』大阪大学文学部国史研究室研究報告第二冊
- 北野耕平 [1999] 「古墳の内部構造からみた古市古墳群の成立」、藤井寺市教育委員会事務局編『古市古墳群の成立』、1999 年所収。
- 北野耕平 [2000] 「東アジアの中の倭王権—中華世界に対する朝鮮三国と倭国」、藤井寺市教育委員会事務局 [2000] 『古市古墳群とその時代 王権の構造と社会の変化』所収。
- 北野耕平 [2002] 「津堂城山古墳とその時代、」藤井寺市教育委員会事務局 [2002] 所収。
- 篠川賢 [2016] 『継体天皇』、吉川弘文館
- 白石太一郎 [1999a] 「古市古墳群の成立とヤマト王権」、藤井寺市教育委員会事務局 [1999] 所収。
- 白石太一郎 [1999b] 『古墳とヤマト政権—古代国家はいかに形成されたか』、文春新書 036、文藝春秋。
- 白石太一郎 [2013] 『日本歴史 私の最新講義 07 古墳からみた倭国の形成と展開』、敬文舎。
- 白石太一郎 [2018] 『古墳の被葬者を推理する』、中央公論社。

新開義夫 [2002] 「津堂城山古墳の発掘調査」、藤井寺市教育委員会事務局 [2002] 所収。

田中晋作 [2016] 『古市古墳群の解明へ 盾塚・鞍塚・珠金塚古墳』、新泉社。

塚口義信 [1993] 『ヤマト王権の謎をとく』、学生社。

天理大学付属天理参考館・天理市教育委員会 [2021] 『物部氏の古墳 杣之内古墳群図録』。

直木孝次郎 [1964] 『日本古代の氏族と天皇』、塙書房。

福永武彦 [2003] 『現代語訳 古事記』、河出書房新社。

藤井寺市教育委員会事務局 [1999] 『古市古墳群の成立』。

藤井寺市教育委員会事務局 [2002] 『津堂城山古墳』。

藤井寺市・藤井寺市教育委員会 [2016] 『倭の五王（讚、珍、濟、興、武）の時代』

古市晃 [2018] 「5・6世紀における倭王と王族」、堺市文化観光局文化部文化財課 2018 『倭の
五王と百舌鳥・古市古墳群－東アジアからみた巨大古墳－』 所収。

古市古墳群研究会 [1985] 古市古墳群研究会編 『古市古墳群とその周辺』、撰河泉文庫。

松木武彦 [2002] 「古市古墳群と『倭軍』の成立」、藤井寺市教育委員会事務局 『津堂城山古墳』
所収

水谷千秋 [2001] 『謎の大王 継体天皇』、文春新書 192。文藝春秋

室賀寿男 [2014] 『息長氏』、青垣出版。

森田克行 [2000] 「継体大王の陵と筑紫津」、財団法人枚方市文化財研究調査会編 『継体大王と
その時代』、和泉書院、所収。

山崎純男 [2008] 『最古の農村 板付遺跡』、新泉社。

和田萃 [1999] 「古代史からみた古市古墳群」、藤井寺市教育委員会事務局 [1999] 所収。